中等國語讀本

新修版

卷七

375.9
Oc8
資料室

41630
教科書文庫
4
810
41-126
2000301570

大正十五年二月十七日
文部省檢定濟
中學校國語科用

中等國語讀本

落合直文編
金子元臣補

株式會社
明治書院

資料室
375.7
Oc8

廣島大學圖書之印

廣島大學教 25699 圖書

目次

一　同じものは二つない……里見　弴……一
二　雜　感……ケーベル……四
　一、余の理想生活……四
　二、三種の人……七
　三、虚榮心……八
三　蘭學事始……菊池　寛……九
四　椿の小舟（新體詩）……野口米次郎……一八
　一、椿の小舟……一八
　二、銀鼠の川……一九
五　建築に現れた美術趣味……松本亦太郎……二〇

六　舊都の月……（平家物語）……二五
七　平家雜感……高山樗牛……二九
一、都落……二九
二、清盛入道……三一
八　壇の浦……（源平盛衰記）……三六
九　うつりゆく日日……永井荷風……四六
一〇　芳流閣……瀧澤馬琴……五五
一一　太郎……芥川龍之介……六一
一二　某評論者に與ふ……夏目漱石……七一
一三　百蟲譜……横井也有……七四
一四　長がたな（俳句）……七九
一五　俚諺論……大西祝……八二

一六　川柳點……金子元臣……八七
一七　みとり日記……小林一茶……九三
一八　奥の細道……松尾芭蕉……一〇〇
一九　鄕土の魅力……相馬御風……一〇五
二〇　國體の精華……穗積八束……一一三
二一　神戰……川端龍子……一一八
二二　熊野落……（太平記）……一二九
二三　自然のあはれ……吉田兼好……一三六
一、月と露……一三六
二、花と月……一三七
三、秋の野ら……一三八
四、四季……一三九

二四　嵐も白し（和歌）……一四三
二五　落花の雪……（太平記）……一四七
附錄　近古文學一覽
（終）

廣島文理大學圖書之印

中等國語讀本　新修一版　卷七

一　同じものは二つない

本質的に云ふなら、人間の一生生まれ落ちるから死ぬまで、少しも變るわけのものではない。所謂「嬰兒の魂百まで」と云ふもので、古今東西Aと云ふ人間は必ず二人とはないのだ。幼時のAが長ずるに及んでA′或はA″にはならうとも、BやCに變るといふことはあり得ないのだ。人間ばかりか、宇宙の森羅萬象は悉皆それぞれ全く新しい創造だ。決して掛替のないものばかりなのだ。この事は知つてゐるだけでなく、實感として、身にしみじみと思ひ當らなければならない大切な事だ。

「誰それは世界的の人物だ」といふやうな言葉がよく使はれる。それは世界中探しても又と二人はない、掛替の得られない大事な人物だ、もし世界がこの人を失つたら、世を擧げて哀悼追惜の情を禁じ得なからうと思はれる大切な人物だといふ意味の言葉だ。

然し前に述べた平凡な事實を、實感として胸にもつてゐる人ならば、各自宇宙的人物たる自覺を失ふことは出來ない筈だ。森羅萬象すべてこれ宇宙的存在なのだ。自分を輕輕しく考へ扱ふといふことは最も恥とすべき淺慮の誤である。

自分は宇宙に探し求めても二つとはない、十分大切にしなければならない筈だといふ實感を摑んでゐないと、つい輕擧盲動に流れ、十把一束に扱はれても、文句のいへない輕輩として終ることになる。

靜におのれを觀じ、おのれに從つて伸びて往つたなら、器の大小、

自分の固性を發揮してゆく

同樣な平凡な人物たらう

類化
應化

固性

性の賢愚、才の優劣は別として、必ずどうにか一人前の、類と眞似手のない人物になれるやうに、ちやんと用意がしてあるものを、わざわざ人眞似をして、勿體ないとも思はずにどしどしおのれを切り崩し、似たり寄つたりに團栗の丈を揃へて喜んでゐる。不思議といへば不思議、滑稽といへば滑稽、悲慘といへば悲慘なわけである。

さて人間は群居動物だ。類と眞似手の無いものばかりが寄り集ると、いやでも間に隙が出來る。稜稜たる氣骨と氣骨とが相觸れて、ゴツンゴツンと世の中が喧しくなる。文明開化の民は、さやうな殺風景な音を好まない。共同一致、これを標語として互にかどかどしい心持を抑へて、世の中を和氣靄靄と暮してゆきたいと冀つてゐる。

我は宇宙に唯ひとりの者だ、この自覺に徹しておのれに生きるか。人は群居動物なりの意識に始終して衆に就くか。

萬々

前者を執れば、荒い風にも、寂しい思にも、痛い目にも會はなければなるまい。

後者を擇べば、無事平穩に、存外氣樂な世渡が出來るだらう。石か珠か。とにかく堅いものになるか。それとも、さういふ堅い物の間に挾るつめ綿になるか。

これは若いうちに、とつくりと考へてみていい數多の諸問題中でも、可なり重要な一つだらうと信ずる。（里見弴――白醉亭漫記）

里見弴　本名山内英夫。明治二十一年横濱市に生まる。學習院出身。

ユートピヤ　Utopia　理想鄉。

二　雜感

一　余の理想生活

私の胸に描ける理想生活とは、如何なるものであるか。

諸君の意味する理想的生活とは、多分夢想鄉（ユートピヤ）の意味でなく、可能なる内で最も幸福なる生活のことであらう。私の全然幸福であり得るは、自ら熟知し又愛好する國に於いてのみである。これは獨逸である。更に獨逸といふ中にも、私の最も好むのは南方の諸邦とチューリンゲンとである。大都市の中では、私にとつてミュンヘンほど好ましいものは一つもない。そこで一般世間及び所謂上流社會から離れた生活で、極めて尋常な確實な收入をもつて精神的勞作に從事し、且どうにかして、他人のために用を足すだけの可なりの健康と、善良で、單純で、平靜で、その上教養ある人達より成れる知友の極めて小な仲間と、自宅に於いては、同時に私の友達でもある如き忠實なる伴侶と助手とが欲しい。それに極めて多數の家畜、特に犬と猫と鷄とが欲しい。「朝の喇叭」ともいふべき雄鷄の居ない家には、私は生きて

ケーベル

チューリンゲン　Thüringen　中獨の邦。首府をワイマルといふ。

ミュンヘン　München　バワリヤの首府。イーザル河畔にあり。獨逸美術の寶庫と稱せらる。

行けない。私の周圍には、一點の贅澤もあつてはならないが、唯私の藏書だけは、すべて一所に竝べて置きたいものである。又ピアノも一つ持つてゐたい。私の地上的欲望はこれ以上には上らないのである。

諸君は恐らく、私が自分の「幸福」のためにこのうへ美しい自然や、圖書館や、美術館や、劇場その他を要求しないのを怪むであらう。所が獨逸に於いては、此等一切のものは、如何なる場合にも隨處に備つて居る。さうして、それがちやうど私の滯在する土地に無くても、屹度極めて近距離の地にあつて、其處へ行くのも容易である。

それから自然に就いては、私の要求は更に小い。伊太利の華麗なる風光とか、雄大なるアルプスのパノラマとか、若しくは所謂美しい自然の如きは、これを不斷に眺めてゐたいとは實際思はない。私の眼に對する「日毎のパン」は、私の胃に對するそれと同樣に單純で

ピアノ　Piano

アルプス　中央歐洲の大山脈。瑞西、佛蘭西、墺太利、伊太利の四國に亙る。　Alps

パノラマ　Panorama

なければならない。即ち草場と窓の前の少しばかりの樹木と花と、遠くにささやかなる森か、若しくは湖があれば澤山である。

（ケーベル博士小品集）

二、三種の人

私の知れる日本人に三種類ある。その第一種に屬する者を、私は愛する。第二種に屬する者は、私をして笑を催さしめる。この兩者に對しては、私は極めて屢同情の念を起さざるを得ない。第三種に屬する者をば私は蔑視する。これは賤むべき成功主義者や、背信者や、憐むべき無情無主義なる假面者や、所謂文士や、僞聖人や、また空虛なる饒舌家を謂ふのである。

此等の徒輩は、その穢い著ずれのした小外套をば、風のまにまに向け換へる。即ち日和見をする。さうして、今日は佛人を氣取るかと思へば、明日はもう英人米人、もしくは更に露西亞人を氣取つて居

ケーベル　歐露に生まれたる獨逸人。モスコー音樂學校卒業後、獨逸に轉じイエナ及びハイデルベルヒ大學に學ぶ。後招かれて來朝し、東京帝國大學哲學科に教授たる事二十一年。大正四年任滿ちて歸國せんとする際世界大戰に會して果さず。大正十二年六月、横濱なる露國總領事館に歿す。（西暦一八四九年―一九二三年）　Raphael Koeber

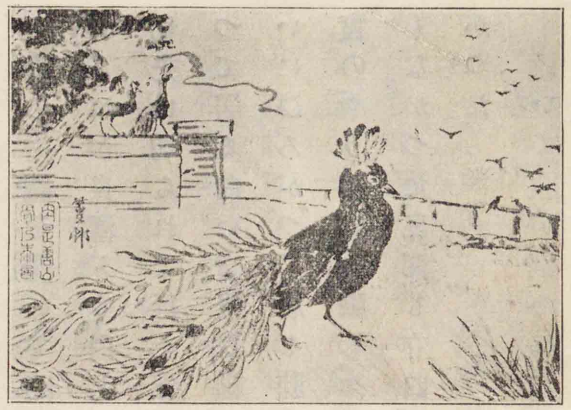
る。然るにこの種の人人は私の所謂日本人には屬しないのであるが、また私は私の知れる日本人も、亦嫌厭の情を以て彼等から面を背けるだらうと望んで居る。「さばれ彼等に就いては默せよ、見て過ぎよ」。（ケーベル博士小品集）

さばれ彼等云云　ダンテ神曲中の句。

三、虛榮心

現代の日本人の精神的生活に於いて、その最後の説明が、例の虛榮心でないやうな現象を見出すことは容易でない。虛榮心は屢日本人を虛言者とする、さうして又欺かれたる自欺者とする。彼等は好んで單なる外觀をば實在の如く、形式をば內容の如く裝ひ、外人の目を眩して、全然存在せざるものを存在するかの如く信ぜしめる。さうして他を眩惑せしむる目的を有つたところの輝ける虛無によつて自ら眩惑せしめられ、また催眠狀態に陷れられる。さうして遂に自ら欺かれるに至るのである。何となれば、虛榮心は危險な

る兩刃のわざ物だからである。それは他を傷けると同時に、虛榮者その人をも破滅に陷れる。卽ち虛榮心は彼を盲目にし、又輕信にし、さうして他の兇惡と私慾との、かの古い、而も永遠に新しい鴉と狐との話が、彼の上に繰り返されるまでは、己が目的のために彼に媚び、さうしてその頭腦を狂亂せしめる所の無意志的道具とまで墮せしめるからである。（ケーベル博士小品集）



イソップの烏

三　蘭學事始

良澤・玄白等六人は打ち連れて觀臟の場所へ往つた。刑場の一部

良澤　蘭學者。前野氏。豐前中津藩醫。中津侯に仕へて江戸に居り、青木昆陽に蘭學を學び、後長崎に遊學す。享和三年歿す。（一七三八年―一八四六年）

玄白　蘭學者。杉田氏。若狹小濱藩の醫。西玄哲、山脇東洋に學ぶ。最も意を外科に用ゐ、解剖に精し。文化十四年歿す。（一七三九年―一八四七年）

刑場　江戸の千住小塚原の刑場なり。

に席を以て粗末な假小屋が設けられてあつた。手醫師の何某が、與力や何かと一緒に待つて居た。

一人の老屠は出刃を手に持つと、無造作に屍體を切り開いて往つた。胸が第一に切り割かれた。良澤も玄白もターヘルアナトミアの胸の繪圖を開いて、開かれて行く屍體の胸と一心に見比べてゐた。それが良澤と玄白とに取つて何と不思議であつたらう。出刃の切先に切られて行く骨の一つも筋の一つも、肉の間に綱の如く走つて居る白い奇怪な線條も、白く浮き上つて居る脂肪も、胸郭一ぱいにひろがつて居る肺も、左肺の下からのぞいて居る眞赤な桃の實のやうな心の臟も、ターヘルアナトミアの繪圖と一分一點の違もなかつた。良澤も玄白も、他の四人も、深い感歎のために聲も出なかつた。

續いて腹が剖かれた。そこに見出された胃、奇怪な形にうづくまつて居る腸、腸胃の陰に隱れてゐる名も知らぬ臟腑まで、和蘭圖と寸分の違もなかつた。老屠が出刃を持つ手を止めると、良澤ははじめて我に歸つたやうに叫んだ。

「至極ぢや、至極ぢや。蘭書の繪圖と寸分の違もござらぬ。和漢千載の諸說は、みな取るに足らぬ妄說と定り申した。醫術はもはや和蘭に止めを刺し申した」。

「至極ぢや、至極ぢや」。

皆は良澤の感激に聲を合はせた。

刑場からの歸途、春泰と良圓とは一足遲れたため、良澤と玄適と淳庵、玄白の四人連であつた。四人は同じ感激に浸つて居た。それは奇妙不思議な和蘭の醫術に對する讃歎の心であつた。刑場から六七町の間、默默として銘銘自分自分の感激に浸つて居たが、淺草田圃にさしかかると、淳庵は堪へぬやうにいつた。今日の實驗只只驚

與力　德川幕府の時諸奉行の配下に屬して、內外の諸事に當る卑役。

ターヘルアナトミア　和蘭の解剖書。解體新書の原本なり。

春泰　蘭學者。嶺氏

良圓　蘭學者。島山氏。

玄適　蘭學者。小杉氏。

淳庵　蘭學者。中川氏。德川幕府の醫官。明和中平賀鳩溪と謀り火浣布を作る。

き入るの外はない事でござる。かほどの事を、これまで心付かずに打ち過してゐたかと思へば、この上もなき恥辱に存ずる。我我醫をもつて主君に仕へる者が、その術の基本とも申すべき人體の眞形をも心得ず、今日まで一日一日とその業を務め申したかと思へば、面目もない事でござる。何とぞ今日の實驗に本づき、大凡にても身體の眞理を辨へて醫をいたさば、醫をもつて天地間に身を立つる申譯にもなる事でござる」。

良澤も玄白も玄適も、淳庵の述懷に同感せずには居られなかつた。玄白はその後を承けていつた。

「いかにも尤の仰ぢや。それにつけても、拙者は如何にも致して、このターヘルアナトミアの一卷を飜譯いたしたいものぢやと存ずる。これだに飜譯いたし申さば、身體內外のこと分明を得て、今日以後療治の上にも大益あることと存ずる」。

良澤も心からうち解けて居た。

「いや杉田氏の仰尤でござる。實は拙者も年來蘭書を讀みたき宿願でござつたが、志を同じうする良友もなく、歎き思ふのみにて日を過してござる。もし各方が志を合はせくださらば、何よりの幸ぢや。幸ひ先年長崎留學のみぎり、蘭語少少は學んでござるほどに、それを種といたし、共共このターヘルアナトミアに讀みかからうではござらぬか」といつた。

前野良澤

玄白も淳庵も玄適も手を拍つてそれに同じた。彼等は異常な感激で結び合はされた。

「然らば『善は急げ』と申す。明日より拙宅へお越しなされい」。

良澤はその大きい眼を輝しながらいつた。

平河町
今の東京市麹町區にあり。

約の如くその翌日を初として、四人は平河町の良澤の家に月五六回づつ相會した。良澤を除いた三人は、和蘭文字の二十五字さへ最初は定かには覺えて居なかつた。良澤は三人の人人に蘭語の手ほどきをした。彼はさすがに長崎へ留學した事があるだけに、多少の蘭語と章句語脈のことも少しは心得て居たけれども、それは殆どいふに足らなかつた。一月ばかり經つと、良澤が三人に敎へる事はもう何も殘つて居なかつた。

三人の手ほどきが濟むと、四人は初めてターヘルアナトミアの書に掛つたが、開卷第一の頁から、ただ茫洋として舵なき船の大洋に乘り出したやうに、何處からとも手の付けやうがなく、あきれにあきれて居る外はなかつたが、二三枚めくつた所に、仰向けになつた人體全象の圖があつた。彼等は考へた。人體內景のことは知りがたいが、表部外象のことは、その名所も一一知つて居ることである

から、圖に於ける符號と、說の中の符號とを合はせ考へることが一番取り付き易いことだと思つた。

かれらは眉、口、脣、耳、腹、股、踵などに付いて居る符號を、文章の中にさがした。そして眉、口、脣などの詞を一つ一つ覺えて往つた。

が、さうして單語だけは分つても、前後の文句は、彼等の乏しい力では一向に解しかねた。一句一章を春の長き一日考へ暮しても、彷彿としてあきらめられないことが屢あつた。四人が三日の間考へぬいて、やつと解いたのは、「眉とは目の上に生じたる毛なり」といふ一句だつたりした。四人はそのたわいもない文句に哄笑しながらも、銘銘嬉涙の眼の中ににじんで來るのを感ぜずには居られなかつた。

眉から目と下つて鼻の處へ來たときに、四人は「鼻とはフルヘッヘンドせしものなり」といふ一句に突き當つてしまつた。無論完全

な辭書はなかつた。ただ良澤が長崎から持ち歸つた小册子に、フルヘッヘンドの譯註があつた。それは「木の枝を斷ちたる後、そのあとフルヘッヘンドをなし、庭を掃除すれば、その塵土集りてフルヘッヘンドをなす」といふ文句だつた。四人はその譯註を引き合はせても容易には解しかねた。

「フルヘッヘンド、フルヘッヘンド」。

四人は折折この言葉を口ずさみながら、巳の刻から申の刻まで考へぬいた。四人は目を見合はせたまま一語も交へずに考へぬいた。申の刻を過ぎた頃に、玄白が躍り上るやうにしてその膝頭を叩いた。

「解せ申した、解せ申した。方方かやうでござる。木の枝を斷ち申したるあと癒え申せば、うづたかくなるでござらう。塵土集ればこれもうづたかくなるでござらう。されば鼻は面中にあつて堆起する

ものでござれば、フルヘッヘンドはうづたかしといふ意でござらうぞ」といつた。

四人は手を拍つて喜び合つた。玄白の眼には涙が光つた。彼の喜は連城の璧を獲たよりも勝つて居た。

連城の璧
趙の惠文王卞和の璧を得、秦の昭王十五城を以てこれに易へんと請ふ。これより連城の璧といふ。

杉田玄白

が、神經などといふ言葉に至つては、一月考へ續けても分らなかつた。彼等は最初難解の言葉に接するごとに、丸に十文字を引いて印とした。それを轡十文字と呼んで居た。初一年の間、どの頁にも、どの題にも轡十文字が無數に散在したが、彼等の先驅者としての勇猛精進はすべてを征服せずには居なかつた。一箇月六七回の定日を、怠なく守つた甲斐があつた。一年餘を過ぎた頃には、譯語の數も殖え、條句の脈も明に、書中の轡

次第に蔗を食ふ　晉書に「顧愷之每レ食ニ甘蔗一常自レ尾至レ本、人或怪レ之、愷之曰漸入ニ佳境一」。

菊池寛　香川縣高松市の人。明治二十二年生まる。京都帝國大學出身の文學士。小說家。小說戲曲の創作頗る多し。雜誌文藝春秋の主幹。

野口米次郎　詩人。慶應義塾大學教授。愛知縣津島町の人。明治八年十二月生まる。慶應義塾に學び、後渡米して數年間詩人ミラーに師事、多くの英詩を發表し歐米人に歎稱せられ、ヨネノゲチとして知らる。

十文字も殘少くかき消されて居た。

先驅者としての苦鬪は、やがて先驅者のみが知る喜で酬いられて居た。語句の末が明になるに隨つて、次第に蔗を食ふが如く、その中に含まれた先人未知の眞理の甘味が、彼等の心に染み付いて來た。

彼等は邦人未到の學問の沃土に、彼等のみが足を踏み入れ得る喜で、會集の期日毎に、兒女子の祭見に行く心地で、夜の明けるのを待ちかねる程になつて居た。（菊池寛――菊池寛全集）

四　椿の小舟（野口米次郎）

一、椿の小舟

生に疲れた椿の花が、

お仕置になつた首のやうに、
ぽとんと……ああら、私の庭の小池に落ちて、
綺麗な小舟となりました。
夢を追ふ春の風は、
目に見えない靈を落葉のやうに
散して、……御覽なさい、椿の小舟に乘つて、
右や左へ漕ぎました。
名の無い草や花が、
小池の岸から聲立てて、
「舟に乘せてよ、舟に乘せてよ」と呼んでも、
春風の靈は啞で聾でありました。

二、銀鼠の川

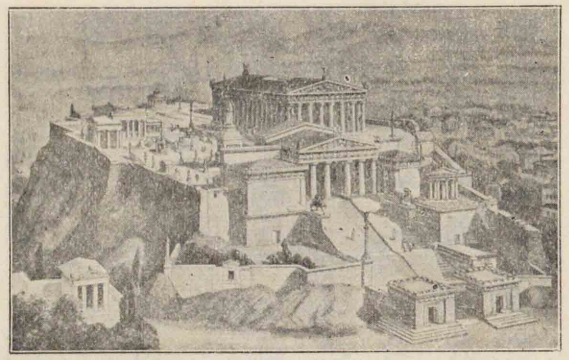
闇を染め拔く銀鼠色の長い川、
僕はその側に立ち、
水に落ちさうな白い鬼百合をあぶないと思ふ。
遠方の蛙が鳴き、
ふわりとした風が菜種の香を持つて來る。
川の銀鼠が金色と變る。
向の山から、
大鼓のやうな黃な月がにゝよと出る。
川に暑くるしい人間の呼吸がする。
僕自身が水に落ちさうな鬼百合ではないかと思ふ。（沈默の血汐）

五　建築に現れた美術趣味

日本でも西洋でも、昔からある大きな建築は宗教的建造物であ

アクロポリス Acropolis　アテネにあり。
フロレンス Florence　伊太利半島北部の首府。
ヴェニス Venice　伊太利の港。西暦十世紀には、東洋との商業の一大中心地なりき。
法隆寺　法相宗の大本山。聖德太子の創建。奈良縣生駒郡法隆寺村にあり。
東大寺　華嚴宗の大本山。聖武天皇の創建。奈良縣奈良市にあり。

る。アクロポリスの神殿、或は羅馬、フロレンス、ヴェニスの寺院を西洋建築の代表とし、法隆寺や、東大寺、或は比叡山あたりの寺院を日本建築の代表とし、兩兩相對峙せしむると、一見明な相違が認められる。西洋の神殿、寺院は、自然界と無關係に築造せられてゐる。その建築は實に偉大華麗ではあるが、多くは人家稠密、車馬喧轟の街衢に建立せられて、天然の背景なく、樹林や水石の幽邃の風趣を添ふるものがない。然るに日本の神社、佛閣に於いては、建築と天然の風光とが頗るよく調和し、それ等の建築は、自然の懷に抱かれて生長して居る趣がある。日本の建築がおもに木材を用ゐ、或は青銅の瓦や板にて屋根を葺くといふこ



アクロポリスの神殿

比叡山　滋賀縣と京都府とに跨る。山上に天台宗の總本山延暦寺あり。

シェルリング　日耳曼の哲學者。エナ、ミューニヒ、ベルリン等諸大學の教授たり。(西暦一七七五年―一八五四年)　Shelling

とが、建築と自然界とを調和せしむる上に、深い意味を有して居る。石造建築はおもに直線より成り、且あまり堅實であるから、日本の丘陵、山嶽のやうに婉曲の形狀を有して居る溫和な風景とは、調子が合はないのであるが、木材建築及び青銅瓦の屋根は、婉曲の線で組み立つることが出來、且輕快な心持があるから、周圍の樹木や丘陵、山嶽とその形狀も色彩も頗るよく一致する。而してこの建築が星霜を重ね、自然に錆びて來ると、恰も天然生えぬきの建築のやうに見え、天人一致の趣が眞によく表現せられる。

シェルリングは「美術は意識、無意識の一致である。世界の幽玄な祕密が、この美術に發顯して居る」といつた。蓋しこの無意識といふのは天然をいひ、意識といふのは人間の心をいふのである。自然界と人間の心、卽ち天爲、人工の調和する所に、天地の祕密は露れ、それに因つて、我我は宇宙の眞相を窺ふことが出來るといふのである。

南禪寺（京都）

が、この說は、日本の美術に於いて一層よく表現せられて居る。日本人は、美なる風景中に神明、佛陀の鎭坐することを希うて居るが、西洋人は、周圍に一本の樹木も一莖の草花も無い石造の殿堂中に、神を閉ぢ籠めんとして居る。アクロポリスの如き、岩石の丘陵上に神殿が立てられてはあるが、その丘陵は全く礎石として用ゐられ、階段として用ゐられて居るに過ぎない。東大寺二月堂の廻廊より、南都遠近の寺院堂塔を山脚山腹、樹木煙霞の間に一望する如き幽邃な趣致は、西洋の寺院建築に就いてこれを認むる事は出來ない。雅典隆盛の頃には、アクロポリスの正面の石門下の段階を登り、一路神殿に通ずる所、左右に歷史上

三寶院　眞言宗古義派の大本山。京都府宇治郡下醍醐にあり。

南禪寺　臨濟宗の本山。京都洛東にあり。

關白道長　藤原氏、兼家の子。一條、三條、後一條、後朱雀の四朝に仕へ、從一位關白太政大臣たり。その三女は三天皇の皇后となる。世に御堂關白と稱す。萬壽四年薨ず。（一八二六年―一八八七年）

無量壽院　道長の造りたる法成寺のうちに在りき。

松本亦太郎　文學博士。群馬縣の人。慶應元年生まる。現に東京帝國大學文學部教授なり。

六月九日　治承四年。

の偉人物を大理石像として竝列してあつた。日本人は、山門內外の直道を樹木鬱蒼たる竝木となし、これに由つて、神殿、佛堂に近づくに先立ち人の心を森嚴ならしむる。彼は人の心を偉人化せしめんとし、我は人の心を天然化せしめようとする。一言にいへば、日本人は宗教的建築に於いて、自然の風光に對する愛好を離ることが出來ない。否自然の風光が現さうとして現し得なかつた所を、建築が補つて現したやうな趣がある。西洋の宗教建築に於いては、自然は無視せられ、人間の力や考の表現が主になり、人爲は天工を壓倒する趣がある。西洋の美術的建築の樣式が障壁式になり、外界を拒絕するに對し、日本のは柱楹式になり、內外相通ずるが如きも、一は用ゐる材料の相違にも由るだらうが、一は又彼我趣味の同じからざるにも由ると解釋することが出來る。

なほ日本の寺院建築の特色として附言すべきものがある。日本の寺院は、寺院建築と住宅建築とを巧に調和し、これを渾化するに林泉の美を以てして居ると共に、また人間の安住する所として、佛も凡夫も一の家族となつて樂む極樂淨土の形相を、寺院の境內に髣髴せしめて居る。例へば醍醐の三寶院や、京都の南禪寺の如き堂內にて、一日なり半日なりを過せば、人間を超脫して居る一種の和い、樂しい、然も寂しくない自然の世界に入つた心持がする。關白道長は晩年無量壽院に籠つて、念佛の聲を斷たず、臨終の時は彌陀の御手に通した村濃の絲を引いて、往生の本願を遂げたといふが、寺院、住宅の一致といふ點から見て、甚だ興深い話である。

（松本亦太郎――渡鳥日記）

六　舊都の月

六月九日の日新都の事始、八月十日の日上棟、十一月十三日遷幸

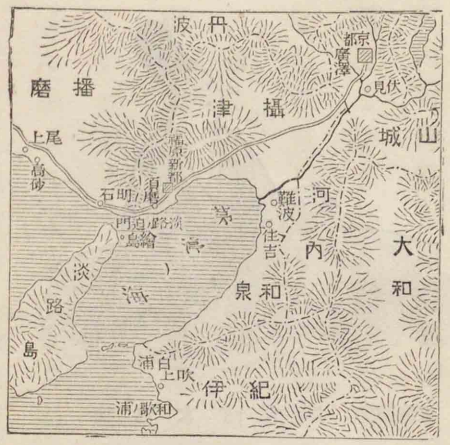
福原　兵庫縣神戸市。
源氏の大將　源氏物語の主人公。
明石　兵庫縣明石市。
住吉　大阪市住吉區。
高砂、尾上　兵庫縣加古郡。
實定卿　藤原氏。公能の子。穎敏にして才學あり。正二位左大臣に至り、建久二年薨ず。世に後德大寺左大臣と稱す。（一七九九年―一八五一年）

と定めらる。舊き都は荒れゆけど、今の都は繁昌す。あさましかりつる夏も暮れて、秋にも既になりにけり。秋もやうやう半になり行けば、福原の新都にましましける人人、名所の月を見むとて、或は源氏の大將の昔の蹤をしのびつつ、須磨より明石の浦づたひ、淡路の迫門をおし渡り、繪島が磯の月を見る。或は白浦、吹上、和歌の浦、住吉、難波、高砂、尾上の月の曙を眺めて歸る人もあり。舊都に殘る人人は伏見、廣澤の月を見る。中にも德大寺の左大將實定卿は舊き都の月を戀ひて、八月十日あまりに福原よりぞ上り給ふ。

何事も皆變りはてて、稀に殘れる家は、門前草深くして庭上露滋し。蓬が杣、淺茅が原、鳥のふしどと荒れ果てて、蟲の聲聲怨みつつ、黃菊、紫蘭の野邊とぞなりにける。今故鄕の名殘とては、近衞河原の大宮ばかりぞましましける。大將その御所にまゐり、まづ隨身を以て惣門を敲かせらるれば、內より女房の聲にて、「誰そや。蓬生の露うち

近衞河原　鴨川の西岸にて、近衞通の東。
大宮　近衞天皇の皇后藤原多子。實定の妹。書畫音律に通ず。建仁元年崩ず。（一八〇〇年―一八六一年）
優婆塞の宮云云　源氏物語宇治十帖のうち、橋姫の卷に見ゆ。

拂ふ人も無きところに」と咎むれば、「これは福原より大將殿の御のぼり候ふ」と申す。「さはべらば、惣門は錠のさされて候ふぞ。東の小門より入らせ給へ」と申しければ、大將「さらば」とて東の小門よりぞ參られける。大宮は、御つれづれに、昔をや思し召し出でさせ給ひけむ、南面の御格子上げさせ、御琵琶あそばされけるところに、大將つと參られたれば、暫く御琵琶をさし置かせ給ひて、「夢かや現か。これへ、これへ」とぞ仰せける。源氏の宇治の卷には、優婆塞の宮の御女、秋の名殘を惜みつつ、琵琶を調べて夜もすがら心をすまし給へるに、有明の月の出でけるを堪へずや思しけむ、撥にて招き給ひけむも今こそ思し召し知られけれ。



小侍從
歌人。石清水八幡檢校別當法印紀光清の女。近衛天皇の皇后多子に仕ふ。

小侍從と申す女房も、この御所にぞ侍はれたる。大將この女房を呼び出でて、昔今の物語どもし給ひて後、小夜もやうやう更け行けば、ふるき都の荒れ行くを、今様にこそ謠はれけれ。

ふるきみやこを　來てみれば
あさぢが原とぞ　あれにける。
月のひかりは　くまなくて、
あき風のみぞ　身にはしむ。

とおし反しおし反し、三反謠ひすまされたりければ、大宮をはじめ奉りて、御所中の女房たち皆袖をぞ沾されける。さる程に、夜もやうやう明け行けば、大將いとまを申して福原へぞ歸られける。（平家物語）

後德大寺實定（爲恭筆）

平家の都落
壽永二年七月。

南都の餘燼
治承四年二月平重衡、奈良法師を攻めて、その寺を燒く。

墨股の勝鬪
壽永元年三月平知盛等、源氏を美濃の墨股川に破る。

木曾云々
壽永二年七月義仲、叡山に據る。

吉野の云云
古今集、詠者未詳「み吉野の山のあなたに宿もがな世のうき時のが

七、平家雜感

一、都落

およそ、世に傳へ遺されたる歷史は多かれど、平家の都落ばかり哀にも目醒しきはなかるべし。南都の餘燼いまだ冷めず、墨股の勝鬪なほ響きぬるに、信越俄に雲亂れて、木曾の五萬騎、はや比叡のあなたに充ち滿ちぬ。宇治、淀の備もろくも潰えて、都も今を限とぞ見えける。あはれ、一門の天下身を置くに處なし。世はかく憂きを三吉野の山のあなたにも隱處は無きか。いざさらば已みなん。都の中にていかにもならんよりは、西國の行幸に御供して、一旦の凌辱を忍ばん。あはれ生死も知らぬこの別路、再び歸り來べき都ならねばとて、六波羅、池殿、西八條以下、一門、譜第の邸宅、宿房、京、白川の四五萬家を併せて、一炬の煙となし果てぬるこそあわただしかりけれ。黑金

ここに鳳闕の礎空しく殘り、椒房の嵐夜夜かなしむ。保元このか

くれがにせむ」。

「炬の煙　唐の杜牧の阿房宮賦に、「楚人一炬、可レ憐焦土」。

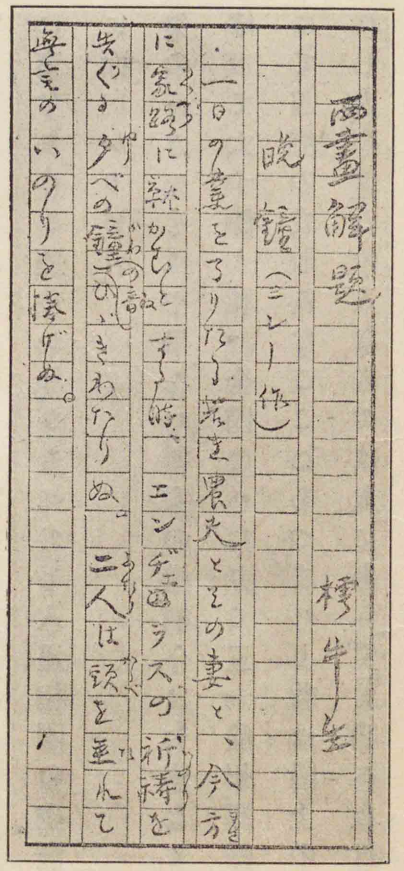
燒野の原云云　平經盛の歌に、「故郷を燒野の原とかへりみて末も煙の波路をぞゆく」。

笛吹く人云々　壽永二年十月平清經、月夜に笛を弄して、海に入る。

た天下の榮華をつくしたる花の都を、燒野の原と顧みて、末は煙の浪、雲の浪、行方も知らずさすらふらん。直衣、束帶の身にも、今は黑金の衣を著けたれど、詠歌の餘哀に狃れて弓矢の響を勵まん心ちせずさても棄て難き命や。今こそはうき世なれ。さすがにしのばるる昔の樣の、夢に入るをばいかにせん。翠華搖搖として西に向へば、秋風到る處に野に滿てり。嗚呼、きのふは東關のもとに轡をならべて十萬餘騎、けふは西海の波に纜を解きて七千餘人。行方の空はわかねども、身にしむ秋は欺かれず。渚に寄する波の音、袂にやどる月の影、すべて心を傷ましむるもののみなり。月の出でくる山の端のあなたの空を故郷とや、日暮舳に立ちて笛吹く人あり。響は遠く煙波

高山樗牛

高山樗牛　文學者。文學博士。名は林次郎。仙臺市の人。雜誌太陽の記者として文藝評論の筆を揮ひて、文名高かりき。明治三十五年十二月歿す。（二五三一年―二五六二年）



高山樗牛筆

をかすめて、三軍ひとしく耳を敲つ。嗚呼、この時この人の懷果して如何。（高山樗牛―樗牛全集）

二、清盛入道

世にもあはれなるは平家とぞいふめる。げにこの一門の盛衰を考ふるに、心も詞も及び難きなり。

案ずれば、一旦の榮華に耽りて百年の計を思はず。今や秋の嵐の

一題の遺詠に云云　忠度をさす。

己身の現在に云云　維盛をさす。

入道相國　平清盛をいふ。

吹き荒ばんずる朝も、春の夜の夢なほ朧にして、覺めての後はさすがに憂き世と觀ずれども、先世、後代、既に梭を換へたるをいかにかすべき。今を昔に反さんすべもかた絲の、縒りくづれたる世こそかへすがへすも是非なけれ。

されば、風雅にかくれては、一題の遺詠に今生の本懷を終へ、恩愛に絆されては、己身の現在に來世の果報を思はず。あはれは桐の一葉に散りそめて、世はとこしへの秋とぞ見えにける。思へば怪しきまでに哀なりける運命かな。さるにても入道相國の生涯こそなかなかに面白かりけれ。

弓矢のいさをしはや畢んぬ。朝家の權柄今はた盛なり。一門殿上にのぼりて六十餘人、私封全國にわたりて三十餘州、攝籙の家は名のみにて、四海の成敗みなここにあつまれり。昔は殿上の交をだに嫌はれし人、今は「この人ならでは人にあらず」と唱へられ、三百の禿

十善　不殺生、不偸盜、不邪淫、不妄語、不惡口、不兩舌、不綺語、不慳貪、不瞋恚、不邪見。

八幡　京都府久世郡なる男山八幡宮。

賀茂　同府愛宕郡なる賀茂神社。

嚴島　安藝の嚴島神社。平氏の尊信せしところ。

城南の離宮に云云　治承三年、後白河法皇を、鳥羽殿に幽し奉る。

射山　藐姑射山の

童は路に往反すれども、京師の長吏、これがために目を側つるばかりなり。されば十善の帝王かしこくも外戚に壓されたまひて、八幡、賀茂の御幸は、八重の潮路の嚴島とぞ觸れられける。なにがしの卿が「入る日をも招き返さんずる勢」と書かれしも、げにことわりと覺ゆ。

不敵なる入道は私門の榮に飽き足らで、世に人も無げにふるまはれけるこそゆゆしけれ。ここに卿相、雲客、流離の難に遇ふもの四十餘人、法皇の御身を以てすら、城南の離宮に射山の嵐をしのばせ給ふ。中にも重代の帝座俄に動きて、愛宕の里のあはれをとどめけるこそなかなかにあさましかりしか。

咲きも殘らず散りも初めぬ櫻花、嵐なくともかくてやはやむべき。一朝東關急を傳へて、大將軍權亮少將維盛、赤地の錦の直垂に、萌黃匂の鎧著て、連錢蘆毛の馬に、金覆輪の鞍置かせたる容儀、帶佩こ

そ、あつぱれ平門隨一の貴公子と見えつれど、富士川の水鳥に算を亂せる十萬餘騎は、いたづらに長き世の笑をとどめたるに過ぎず。加ふるに北土俄に雲亂れて、木曾の山氣やうやく都に逼り、兩山の衆徒また既に反覆の色を示しぬ。平家の運命日にますます急なり。

平清盛

時しも入道は病にかかりぬ。あはれ病の床のさびしきに、霜夜の鐘の響の枕に沈む時、安藝守の昔より太政入道の今に至るまで、六十四年の生涯を靜に憶ひ出でたる時、しかして命の際の身ぞと觀じたる時、彼果して如何の感慨をか催しけん。一代の榮華身にあまりて、保平のいさをしまたいふに足らずと思はざりしか、おのれにつらかりける人人を、かくまでに惱したることの、罪深しとは思はざ

略。重代の帝座云云

治承四年、福原に遷都す。

維盛

重盛の子。平氏都落の後高野山に到りて僧となる。（一八二〇年―）

兩山

叡山と奈良と。

保平

保元、平治の略。

りしか、幾度か帝座を驚し奉りしはては、軍兵を擁して法皇を幽閉しまゐらせつることの、中にも非道の所行なりとは思はざりしか。更に小松の內府が身命にかへて、乃父の罪業を救はんとせし至孝の情に想ひ到りて、恩愛のきづなにうたた悔恨の心を動すことなかりしか。佛門に歸依して入道と呼びなせる身の、今や六慾煩惱の絆を離れんずる大事のきはに、今生の名利を棄てて未來の淨樂を欣求する一念を發することなかりしか。皆あらず。入道は、死に至るまでその初念を翻すことなく、まさにその生けるが如くにして死せしなり。

今はの詞にいはく、「兵衞佐頼朝が首を見ざりつるこそかへすがへすも遺憾なれ。われ死したりとて佛事孝養をもすべからず、堂塔をも建つべからず。いそぎ討手を下し、かれが首を刎ねてわが墓前に懸けよ。これぞ、われに對しての今生、後生の孝養にてはあらんず

小松內府

內大臣平重盛。世に小松殿と稱す。治承三年七月薨す。（一七九八年―一八三九年）

六慾

眼耳鼻舌身意の六根の慾。

る」と。一念の執著に必衰の運命をものともせず、三世の因果を身に惹くとも、なほ怨敵に報いんことを必せり。その事の可否はしばらく措き、とまれかくまれ丈夫たる心の強きは感ずべきなり。たとひ四海の波を翻してかれが頭にそそぐとも、なほこの一我をいかにともすること能はざらん。六尺の眇軀ここに至れば、天地の大にも比ぶべく、運命われにおいて浮塵にひとしからん。いはゆる死してしかして生けるものといふべきか。（高山樗牛――樗牛全集）

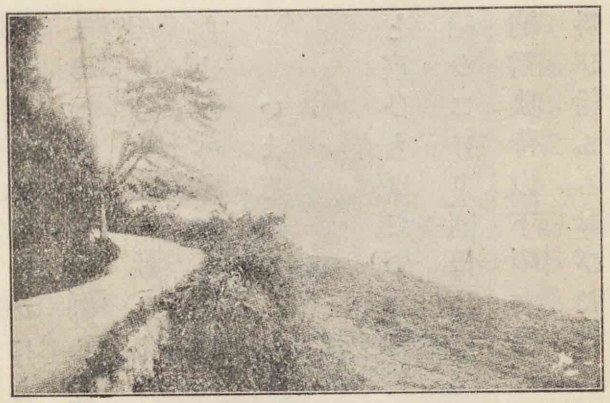
死して云云　ローマのキケロ、その友スキピオの死を弔していはく、「死せりと雖も尚生く」と。

知盛　清盛の子。壽永四年三月壇浦に戰死す。（一八一二年―一八四五年）

八　壇の浦

さるほどに、源氏の兵どもいとど力を得て、平家の船に漕ぎ寄せ亂れ乘る。遠きをば射、近きをば斬る。たて横散散に攻む。水手、かんどり、櫓を棄て楫を捨てて船を直すに及ばず、射伏せられ切り伏せられ、船底に倒れ水の底に入る。新中納言知盛卿は、女院、二位殿などの

乘り給へる御船に參られたりければ、女房たち、「こはいかになり侍りぬるぞ」と宣ひければ、「今はともかくも申すに詞足らず。かねて思ひ設けしことなり。めづらしき東男どもをこそ御覽ぜむずらめ」とてうち笑ひ給ふ。手づから船の掃除して、見苦しき物ども海に取り入れ、「ここ拭へ、かしこ拂へ」など宣ふ。さほどの事になり侍るなるに、靜なるたはぶれ言かな」とて、女房たち聲聲をめき叫び給ふ。



壇の浦

二位殿は今はかぎりと見はて給ひにければ、練色の二衣引きまとひ、白袴のそば高く挾みて、主上を抱き奉り、帶にてわが身に結びあはせ參らせ、寶劍を腰にさし、神璽を

女院　建禮門院德子。平清盛の女。高倉天皇の中宮。建保元年十二月薨ず。（一八一五年―一八七三年）

二位殿　清盛の後室平時子。（―一八四五年）

練色の二衣　練色とは薄黃色をいふ。二衣とは、おなじ色の二枚襲をいふ。

主上　安德天皇。

脇に挾みて船ばたに臨み給ふ。主上は八つにぞならせ給ひける。御年のほどよりはねびととのほらせ給ひて、御形あてにうつくしく、御髪黑くふさやかにして、御背にかけ給へる御貌たぐひなくぞ見えさせ給ひける。御心迷ひたる御氣色にて、「こはいづこへ行くべきぞ」と仰せられけるこそ悲しけれ。二位殿は、「兵どもが御船に矢を參らせ候へば、別の御船へ行幸なし參らせ候ふ」とて、

いまぞ知る、みもすそ河の流には、
涙のしたにもみやこありとは。

と宣ひもはてず、海に入り給ひければ、八條殿同じくつづきて入り給ひにけり。國母建禮門院をはじめ奉りて、主上の御乳母帥典侍、大納言典侍以下の女房たち、船の艫舳に臥しまろび、聲をととのへて叫び給ふもおびただし。浮きもや上らせ給ふと、しばしは見奉りけれども、二位殿も八條殿も、深く沈みて見え給はず。あはれ一天の主

殿をば長生云云　慶滋保胤の天子萬年の詩に、「長生殿裏春秋富、不老門前日月長」。

萬乘　漢書刑法志に「天子畿方千里、提封百萬井、定出賦六十四萬井、戎馬四萬匹、兵車萬乘、故謂二萬乘之主一」。

として、殿をば長生と祝ひ、門をば不老と名づけしかども、今は雲上の龍下りて忽に海中の鱗となり給ふこそ悲しけれ。あはれなるかな、花に喩へし十善の御粧、無常の風に匂を失ひ、悲しいかな、月にかがやきし萬乘の玉體、蒼海の涙に影を沈めおはすること。無常もとよりさだめなし、有待誰かはたのみあるなれども、清涼、紫宸の玉の臺を振り捨てて、鬪戰、兵革の船中に行幸して、いまだ十歳にだにも滿じ給はぬ御齡に、忽に波の底に入り給ひけむ、あはれといふもおろかなり。

義經主從

女院は後れ奉らじと、御燒石と御硯の箱とを左右の御袂にやどし入れ、御身を重くして、つづきて海に入らせ給ひけるを、渡邊源次

- 忠盛
  - 清盛
    - 重盛
      - 維盛
      - 資盛
      - 清經
    - 宗盛
      - 清宗
    - 知盛
      - 知章
    - 重衡
    - 德子
    - 經盛
      - 經正
      - 敦盛
    - 教盛
      - 通盛
      - 教經
    - 頼盛
    - 忠度

藤重の十二ひとへ　藤重は表薄紫裏青。十二單は女官の裝束の稱。

兵衞番が子に源五馬允昵といふもの、いそぎ飛び入りてかづきあげ奉りけるを、昵が郎等熊手を下して、御髪をから卷きて御船に引き入れ奉る。彌生の末のことなれば、藤重の十二ひとへの御衣を召されたり。翡翠の御髪よりはじめて皆しほたれおはしますぞ御いたはしき。昵はもしやの時とて、鎧唐櫃の底に持ちたりける唐綾の白小袖一襲取り出して女院に參らせたりけるは、夷なれどもなさけあり。昵は近くは參り寄らず、程を隔て畏りて、「君は女院にて渡らせおはするか」と度度たづね申しければ、御覽じ馴れぬ夷のありさまおそろしく思し召しけれども、御詞をば出させ給はず、二度打ちうなづかせ給ひけり。

源氏の郎等に後藤三範綱は、平家の船に飛び入りて、弓をば捨て打物拔いて走り回りけるを、越中次郎兵衞盛嗣寄せあはせ、組んで重なり、上になり下になり、船中を五ころび六ころびしければ、たがひに刀を拔く隙もなかりけるところに、盛嗣を助けむとて、惡七兵衞景清、範綱をば刺してけり。能登守教經は、元來心剛に身健にして、進むことありて退くことなし。軍敗れぬと見えければ、思ひ切り死生知らずにふるまふ。これぞ聞ゆる能登守とて、われ先にと爭ひてかかりけれども、少しも面を振らず戰ふ。矢頃に廻る者をば、さしつめさしつめ射けるに、更にあだ矢なし。近づくものをば引き寄せ、提げて海へ投げ入れければ、面を向け難し。太刀にて切るは少く、水にはまるは多し。

知盛卿これを見て、「よしなき事し給ふものかな。このともがらは皆歩兵にこそ侍りぬれ。あながちに目に立て給ふべきにあらず。自害をもし給へかし」と宣へば、さては九郎冠者に組めとにこそ、それは存ずるところなり、いかがはせむと伺ひ回るところに、判官の船と能登守の船と摺りあはせて通りけり。能登守然るべしとて、判官

教經　教盛の子。驍勇絶倫にして射術に名あり。（一八二〇年―一八四五年）

九郎冠者　源義經をいふ。

判官　これも義經をいふ。當時義

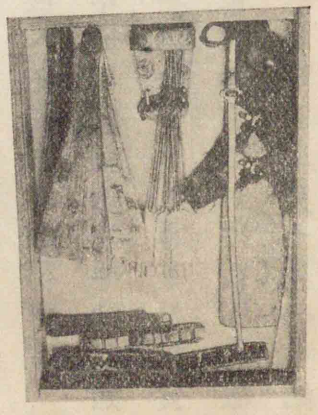
の船に乘り移り、兜をば脱ぎ捨て、大童になり、鎧の袖、草摺ちぎり捨て、輕輕と身をしたためて、いづれ九郎ならむと馳せめぐる。判官かねて存知して、とかく違つて、組まじ組まじと紛れ行く。さすが大將軍と覺えて、鎧に小長刀突いて武者一人あり。能登守目をかけて、「軍將義經と見るは僻目か。故太政入道の弟門脇中納言敎盛の二男に能登守敎經」と名告り、にこと笑ひて飛びかかる。判官は組んでは協はじと思ひて、尻足踏んでぞ休らひける。大將軍を組ませじとて、郎等どもが立て隔て立て隔てしけれども、「除けやつばら。人人しき」とて、海の中へ踏み入れ取り入れ、つと寄る。既に組まむとしければ、判官早業人に勝れたり。小長刀を脇に挾み、さし括りたる弓だけ二つばかりなる鄰の船へ、つと飛び移り、長刀取り直して、船端ににこと笑ひて立ちたりけり。能登守は力こそ勝れたりけれども、早業は判官に及ばねば、力なくして船に留り、「ああ飛びたり、飛びたり」とほむ。

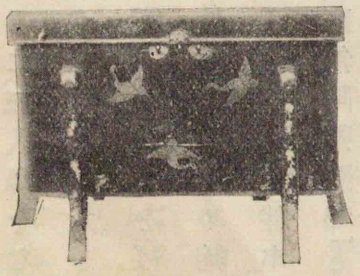
經檢非違使尉たり。

太政入道平清盛をいふ。

敎盛　清盛の弟。（一七八九年―一八四五年）

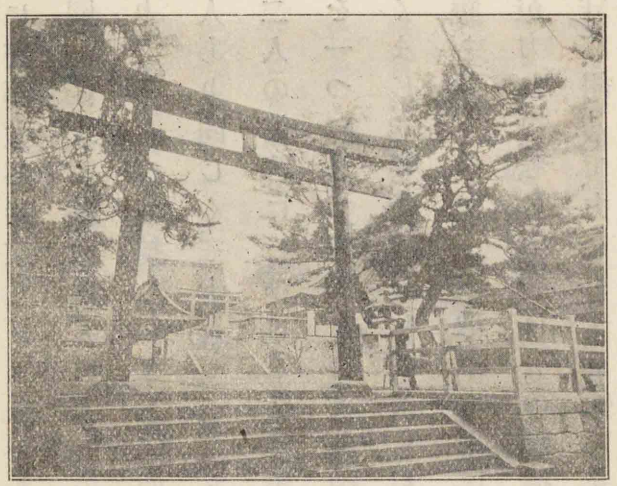
その後能登守今をかぎりと狂ひ回りければ、面を向け難し。ここに安藝太郎時家といふものあり。阿波國の住人安藝大領といふものの子なり。三十人が力持ちたりと聞ゆ。郎等二人あり。同じく三十人づつ力あり。時家二人の郎等にいひけるは、「吾等三人心を一つにして組まむには、鬼神といふとも負くまじ。能登殿强しといふとも、やはは三人には勝ち給ふべき。三人取つてあはすれば、九十人が力なり。私の力業は人の證據に立たず。能登守に組んで、力をも人に知らせ、剛の名をも極めむと思ふはいかに」といへば、郎等「仔細にや及ぶべき」とて、三人一度に鎩を傾け打つてかかる。能登守は、源氏の





安德天皇の御玩具とそを納めたる唐櫃

郎等に名もあり力もあればこそ、教經にはかかるらめ、これぞ軍の最後なると思ひければ、しづしづと相待つところに、三人鼻をならべ、隙間もなくつと寄る。一人をば海中へたうと蹴入れ、二人をば左右の脇にかい挾んで、一しめ締めて、「いざおのれら、教經が御伴申せ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」とて海の底へぞ沈みける。



赤間神社

平中納言教盛卿、新中納言知盛卿は、一所におはしけるが、伊賀平内左衛門を召されて、「いかに家長、見るべきことは見つ。先帝を始めまゐらせて、一門の人人自害し海に入りぬ。今までもかくあれば、つれなき命を惜むに似たり。大臣殿はいかになり給ひぬるやらむ」と問ひ給ふ。家長涙を流して、「大臣殿、右衛門督殿二人は、一度に海に入り給ひたりつるを、敵熊手にかけ奉りて、二所ながら引き上げ捕り参らせ候ひぬ」と申しければ、知盛卿は「あな心うの。など深くは沈み給はざりけるぞ」と二度宣ひて、涙をはらはらと流して、「今は何をか見聞くべき。家長日頃の約束はいかに」と仰せられければ、「今更君に離れ奉りて、いづちへ行くべきに候はず。御伴なり」と申せば、知盛卿世に嬉しげに思ひて、平中納言教盛卿と、鎧脱ぎ捨てて、西に向ひ念佛申して、兩人自害せられければ、有國、家長以下、侍八人、同じ枕に自害して伏しぬ。あはれ、この人に世を譲りたらば、たとひ運の極なりとも、都にていかにもなり給ひなまし」と惜まぬ者はなかりけり。

赤旗、赤符海上に充ち滿ちて、紅葉を嵐の吹き散したるが如し。海水も血に變じて、渚渚に寄する波、薄紅にぞ流れける。主を失へる船

大臣殿　内大臣平宗盛。壇浦の戰に生捕られ、近江篠原にて斬らる。（一八〇七年―一八四五年）

右衛門督殿　宗盛の長子清宗。壇浦にて父と共に生捕られ、近江篠原にて斬らる。（一八二九年―一八四五年）

は風に隨ひ潮に引かれて、越路の雁の行を亂るが如く、膚を離れた
る衣は水に浮き波に爭うて、蜀江の錦の色を洗ふかと疑はる。玉樓
金殿の昔の榮華、船中、浪底の今のありさま、思ひならべて哀なり。

（源平盛衰記）

蜀江の云云　白氏六帖に、「蜀成都有濯錦之江」云云」。

九　うつりゆく日日

鐵の橋や堀割の水からは、遠い遠い山の手の古庭に、春の花は、支
那の詩人が春風二十四番と數へたやうに、梅、連翹、桃、木蘭、藤、山吹、牡
丹、芍藥と順順に咲いて散つて行つた。

春風二十四番　二十四番花信風のこと。焦氏筆乘に「小寒より穀雨に至るまで四月八氣二十四候とし、候毎に五日にして、一花の風信を以てこれに應ず」。

あかるい日の光の中に、燃えては消えて行くさまざまな色彩の
變轉は、默つて寂しくうち眺める自分の胸に、悲しい昔物語の極め
て美しい一章を讀み行くやうな軟い悲哀を傳へる。

「わが悲むは過ぎ行く今年の春の爲ではない。また來るべき翌年

の春の爲」。

と歌つたのは誰であつたか忘れてしまつたが、「春はわが身に取つ
て異なる秋に過ぎない」と云つたのは、南國の人の常として更に秋
を好むジャン・モレアスである。

ジャン・モレアス　佛國の象徵派詩人。章句の典雅を以て知らる。Jean Moreas

空は日毎に青く澄んで、よく花見がへりの午後から、突然暴風に
なるやうな氣候の激變は全くなくなつた。日の光は次第に強くな
つて、赤みの多い橙色の夕日は、もう黃昏も過ぎ去る頃かと思ふ時
分まで、案外長く、何時までも高い樫の梢の半面や、又は低く突き出
した楓の枝先などに殘つて居て、或は何處からさし込んで來るの
とも知れず、植込の奥深い土の上に、ばらばらな斑點を描いて居る
こともあつた。

さういふ夕方に空を仰ぐと、冬には決して見られない薄鼠色の
鱗雲が、名殘の夕日に染められたなり動かずに、空一ぱいに浮いて

ゐて、草の葉をも搖がさぬ輕い風が、自然と食後の人をば、星の冴えそめる頃まで遠く郊外の方へと連れて行く。何處を見ても、若葉の綠は用水のやうに漲り溢れて、日の光に照される。その色の强さは、座敷の障子にまで反映するほどである。どんより曇つた日には、綠の色は却つて鮮に澄み渡つて、沈思につかれた人の神經には、軟い木の葉の綠の色から、一種いひがたい優しい音響が發するやうな心持をさせることさへあつた。

古庭は非常に暗く狹くなつた。

繁つた木立が、その枝を蔽ふ木の葉の重さに堪へぬやうな、憂はしい、苦しい樣子を見せるばかりでなく、壓迫の苦惱は目に見えぬ空氣の中に漲つてゐる。西からとも東からとも、殆ど方向の定らぬ風が、水でも投げ捨てるやうに突然吹き下りて突然消えると、こんもりした暗い樹木は、蛇が鱗を動すやうな氣味惡い波動をば、俯向

いた木の葉の茂から茂へと傳へる。折折雨が降つて來ても、庭の地面は冬のやうにすぐ濡れはせず、濡れると却つて土地の熱氣を吐き出すやうに、一體の氣候をいやに蒸し暑くさせる。

伸び切つた若葉の尖つた葉末に、雨の雫の滴りもせずに留つて居るのを、曇りながらに何處かしら、ぱつとあかるい空の光が寶石のやうに麗しく輝す。石に蒸す青苔にも、樹の根元の雜草にも、小な花が咲いて、植込の蔭には雨を避ける蚊の群が、雨の絲と同じやうにこまかく動く。

雲が流れて强い日光が照り始めると、すぐに苺が熟した。枇杷の實が次第に色づいた。無花果の葉裏には、もう鳩の卵ほどの實がなつて居た。最早庭中何處を見ても花と云ふものは一つもない。日あたりの惡い木立の奥に、氣味惡く青白い紫陽花が咲きかけたばかりで、青かつた木の葉の今は恐しく黑ずんで來たのが、いふにいは

れぬほど不快に見えてならぬ。古庭は益暗くなつて行く。

家中の障子を盡く開け放して、空の青さと木の葉の綠とを眺めて、午後の暑さに草苺や櫻の實を貪つた時は、風に動く木の葉の乾いた響が、殊更に晴れた夏といふ快い感じを起させたが、今ではもう、降りつづく雨の日は木の葉一つ動かずに沈み返つて、不斷は朝から聞えるさまざまな街の物音、物賣の聲も全くとだえた。午前の十時ごろが、丁度夕方のやうに薄暗い時、いつもは他の物音に遮られて聞えない遠い寺の時の鐘が、音波のすすみを目に見せるやうに響いて來る。

すると、この寺の鐘は冬の午後によく聞き馴れた響なので、自分の胸には、冬に感ずる冬の悲が時ならず喚び起されて、世の中には歡樂も色彩も何にもないやうな氣がして、取り返しのつかない後悔が、倦怠の世界に獨で跋扈するのだ。筆の軸は心地惡くねばつて、

ヴェルレーヌ　佛國の象徴詩人。（西暦一八四四年―一八九六年）　Verlaine

ロダンバック　白耳義の詩人。美しき清純の作を以て名あり。（西暦一八五五年―一八九八年）　Rodenbach

詩集の表紙に黴が生える。壁と押入からは濕氣の臭が涌き出し、手箱の底に祕藏する昔の友人の手紙をば蟲が喰ふ。蛞蝓の匐ふ縁側に、悲しい寂しい蟇の歌が聞える。濕つて寒いので、室の障子は一枚も開けたくはないけれど、あまりの薄暗さに折折縁先に出て佇んで見ると、雨の絲は高い空から庭中の樹木を、蜘蛛の網のやうに根氣よく包んで居る。ヴェルレーヌが、

「都に雨の降る如く、
わが心にも雨が降る」。

と歌つたやうな音樂的な雨ではない。あの詩は響の強い秋の時雨を思はせるが、現代に最も悲しい詩人と云はれた白耳義のローダンバックが、

「滅びしものの聲なき涙の如く、
死せし人の閉されし眼より落つる涙の如く」。

と、色も音もない彼の國の冬の雨を歌つた詞は、いま最も適切に自分の記憶に喚び返される。

然し、それら近世の詩人に取つては、悲愁、苦惱は屢何物にも換へがたい一種の快感を齎すことがある。梅雨の時節に見られない特別の恍惚を自分は見出す。それは絶望した心が、美しいものの代に恐しく醜いものを要求し、自分から自分の感情に復讐を企てようとする時で、晴れた日には行くことのない場末の貧しい町や露地裏などに、却つて散歩の足を向ける。そして雨に濡れた汚い人家の燈火を眺めると、何處にか酒呑の亭主に毆られて泣く女房の聲や、他人に苛まれる孤兒の悲鳴でも聞えはせぬかと、恐れるよりは聞いたならどんな心持がするだらうと、一心に耳を敲てる。

或夜非常に晩く、自分は重たい傘を肩にして、眞暗な山の手の横町を歸つて來る時、迷つた犬の子が哀に鼻を鳴して、人の後に尾いて來るのを見たが、多分その犬であらう、自分は家へ這入つて寢床に就いてから、夜中遠くの方で鳴いては止み、止んでは又鳴く犬の子の聲を、夜中斷えては續く雨滴の音の中に聞いた。

雨は折折降り止む。すると空は無論隙間なく曇りきつて居ながら、日が照るかと思ふ程にあかるくなつて、庭中の樹木は茂の輕重に隨つて、陰影の濃淡を鮮にし、すべての物の色が黃昏の時のやうに浮き立つて來るので、感じ易い心は、すぐさま秋の黃昏に我知らず耽るやうに、果しのない夢想に引き入れられる。薄曇の空の光に、日頃は黑い綠の木の葉が、一帶に秋の如く薄く黃ばんでしまつて、庭のかなたこなたに溜つた池のやうな水の面は、眩しいばかり澄み渡つて、もう大分紫の色濃くなつた紫陽花の反映して居るのが如何にも美しい。少しの風もないのに、扇骨木の生垣からは赤くなつた去年の古葉が雨の雫と共に頻と落ちる。

山の手　東京市内の高臺に位する地を下町に對していふ。

プレリュード Prelude 序樂。

雀の聲が俄にかしましく聞え出すと、それが雨の晴間に生き返る生活の音樂のプレリュードで、この季節に新しく聞く苗賣の長く節をつけて歌ふ聲、續いて露西亞パン賣、その呼聲を珍しさうに眞似する子供の叫が、彼方から彼方へと移つて行くので、パン賣は横町を遠くへと曲つて往つたことがよく分つた。冬にも春にも日頃いつまでも聞く街の聲は、一時に近く遠く聞え出したが、すると程なく、再び耳元近くブリキ製の樋に、屋根から傳り落ちる雨垂の響に、自分は初めて目には見えない糠雨が、空の霽れさうにあかるくなつて居るにも拘らず、いつの間にかまた降り出してゐたのに心付くのであつた。

枇杷の實が熟しきつて地に落ちて腐つた。廁に續く緣先に南天燭の木がある。その花はいかなる暗い雨の日にも、雪のやうに白く咲いて、房のやうに下つてゐる。自分は幼い時「この花の散りつくすまで雨は決して霽れない」と語つた乳母の詞を思ひ出した。

（永井荷風――荷風集）

永井荷風　小説家。名は壯吉。東京市の人。明治十二年生まる。東京外國語學校に學び、後米佛に遊ぶ。

禍福は云々　漢書賈誼傳に「禍之與レ福兮、何異ニ糾纆一」。

福の倚る所云云　老子に「禍兮福所レ伏、福兮禍所レ伏、孰知ニ其極一」。

滸我　下總國猿島郡古河。

一〇　芳流閣

古の人謂はずや「禍福は糾へる繩のごとし」と。人間萬事往くとして、塞翁が馬ならぬはなし。こは福の倚る所、はた禍の伏する所、彼にあれば此にあり、とは思へども豫てより、誰かよくその極を知らん。憐むべし犬塚信乃は、親の遺言記念の名刀、心に占めつ身につけつ、艱苦のうちに年を經て、得難き時を得てければ、遙遙滸我へ齎して、名を揚げ家を興すべかりつる、その福は禍と、降りかはりたる村雨の、刃は故の物ならで、我が身を劈く讐となる、憾をここに釋く由もなく、事急にして意外に出づ。僅に當座の辱を、避けなんと思ふばかりに、許多の圍みを切り開きて、芳流閣の屋の上に、攀ぢ登れどもと

にかくに、脱れ去るべき道の無ければ、其處に必死を極めたる、心の中は如何ならん、思ひ遣るだにいといたまし。

されば又犬飼見八信道は、犯せる罪のあらずして、月ごろ獄舍に繫がれし、禍は今恩赦の福、我が縛の索解けて、人にかからん捕手の役儀「犬塚信乃を搦めよ」とて、なまじひに擇みいだされつ。他の憂を身の面目に、今更用ゐられん事、願はしからずと思へども、辭みて許さるべくもあらぬ、君命重く彌高き、彼の樓閣は三層なり。その二層なる屋の上まで、身を翳ませて登りて見れば、足下遠く雲近く、照る日烈しく堪へがたき、頃は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の、火照を渡る敷瓦は、うねり隙なく波に似て、下には大河滔滔たる、ここ生死の海に入る、

瀧澤馬琴

坂東太郎　利根川の別稱。

成氏朝臣　足利氏。持氏の子。鎌倉管領。後古河に住み古河公方と稱す。明應六年卒す。（一二一五七年）

墨氏　名は翟。周代の學者。

魯般　姓は公輸、名は般。周代の魯の人。故に魯般といふ。

流は名に負ふ坂東太郎、水際の小舟楫を絶えて、進退既に谷れる、敵にしあればいかで我、繫ぎ留めんと軈の、木傳ふ如くさらさらと、登り果てたる三層の、屋根にはまぶしさす由もなく、かたみに隙を窺ひつつ、睨まへあうて立つたる有樣、浮圖の上なる鶴の巢を、大蛇の狙ふに似たりけり。

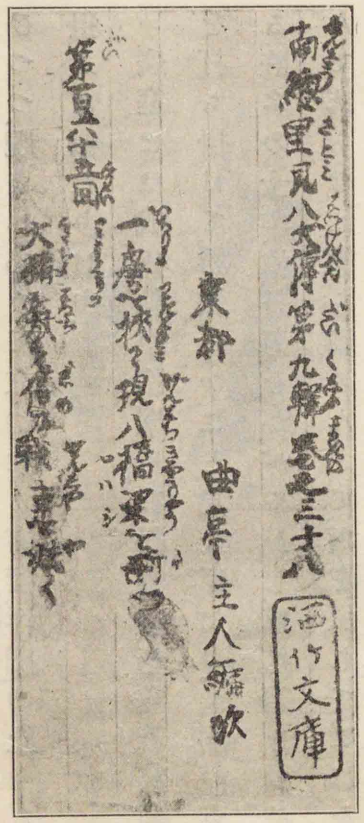
廣庭には成氏朝臣、横堀史在村等の、老黨若黨圍繞せる、床几に腰を打ち掛けて、勝負いかにと見上げたり。又閣の東西には、腹卷した る許多の士卒、槍、長刀をかがやかし、或は箭を負ひ弓杖突き立て、組んで落ちなば擊ち留めんとて、項を反してこれを觀る。然のみならず外方は、連綿として杳なる、河水遶りて砌を浸せば、たとひ信乃、武事長け力衰へず、よく見八に捷ちたりとも、墨氏が飛鳶を借らざれば、虛空を翔るべくもあらず、魯般が雲の梯なければ、地上に下るべくもあらず。彼鳥ならねど羅に入りぬ、獸ならねど狩場に在り。三寸

膳臣巴提便　欽明天皇の朝の人。百濟に使し、雪夜幼兒の虎に食はれたるを憤り、虎穴を探りて虎を獲たり。

富田の三郎　和田義盛の臣。將軍實朝の御前にて、二箇の大鹿角を重ねて折る。

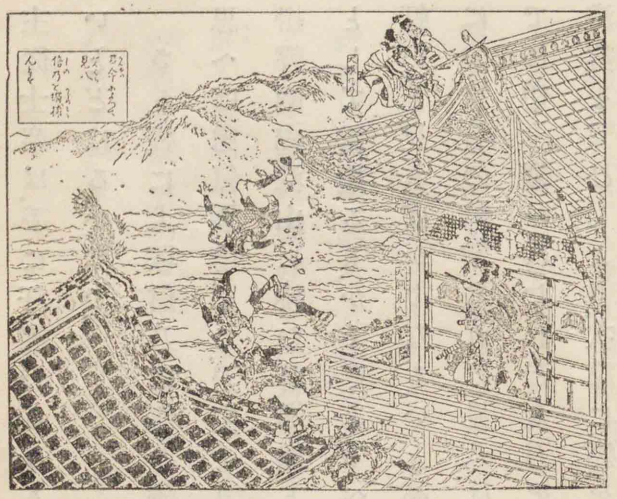
息絶えなば、事みな休まん。脱れ果てじと見えたりけり。

そのとき信乃思ふやう、初層二層の屋の上まで、追ひ登らんとせし兵等を、切り落しつるその後は、絶えて近づく者なきに、今唯獨登り來ぬるは世に覺ある力士ならん。きやつはこれ膳臣巴提便が、虎を暴にせし勇あるか、また富田の三郎が、鹿の角折りし力あるか、遮莫一人の敵なり、引つ組んで刺し違へ、死ぬるに難き事やはある、よき敵にこそ御座んなれ、目に物見せんと血刀を、袴の稜もて推し拭ひ、高嶺のごとき方棟に、立つたる儘に寄するを待てば、見八も亦思ふやう、彼の犬塚が



馬琴の原稿

武藝勇悍、素より萬夫不當の敵なり、さりとても搦めかねて、他の援を借ることあらば、獄舍の中よりこの役儀に、擇り出されつるかひも無し、搦め捕るとも擊たるとも、勝負を一時に決せんと、思ひにければちつとも擬議せず「御諚ざふ」と呼び掛けて、持つたる十手を閃し、飛ぶがごとくに方棟の左の方より進み登りて、組まんとすれども寄せ附けず。「心得たり」と鋭き太刀風に、擊つをはつしと受け留めて、拂へばすかさずこむ刀尖を、支へて流す一上一下、滑る甍を踏み止めて、頻に進む捕手の祕術、彼方も劣らぬ手練の働、嵩より落す太



版本挿絵

刀筋を、あちこち外す虚虚實實、いまだ勝負をわかざれば、廣庭なる主從士卒は、手に汗握らざるもなく、瞬もせず氣を籠めて、見る目もいとどはるかなり。

さる程に犬塚信乃は、侮り難き見八が、武藝に敵を得たりけりと、思へば勇氣彌增して、刀尖より火出づるまで、寄せては返す太刀音、掛聲、兩虎深山に挑む時、颯然として風發り、二龍青潭に鬪ふ時、沛然として雲起るも、かくぞあるべき。春ならば峯の霞か、夏ならば夕の虹かと見るばかりなる、いと高き屋の棟にして、死を爭へる爲體、世に未曾有の晴業なれば、見八は被籠の鐔肱當のはづれを、裏かくまでに切り裂かれたれど、太刀を拔かず、信乃は刀の刃も續かで、初に淺痍を負ひしより、次第に疼を覺ゆれども、足場を計りて撓まず去らず、疊みかけて擊つ太刀を、見八右手に受け流して、返す拳に付け入りつつ、やつと掛けたる聲と共に、眉間を望みてはたと打つ、十手をちやうと受け留むる、信乃が刃は鍔際より、折れて遙に飛び失せつ。見八得たりとむんづと組むを、そが儘左手に引き著けて、かたみに利腕しかと取り、捩ぢ倒さんとえい聲合はせて、揉みつ揉まるる力足、これかれ齊しく踏みずべらして、河邊の方へころころと、身を輾ばする覆車の俵、坂より落すに異ならず。句配險しき棧閣に、削り成したる甍の勢、止るべくもあらざめれど、かたみに執つたる手を緩めず、幾十尋なる屋の上より、末遙なる河水の、底には入らで程もよし、水際に繫げる小舟の中へ、打ち累りつつどうと落つれば、傾く舷と立つ浪に、ざんぶと音する水煙纜ちやうと張り切つて、射る矢の如き早河の眞中へ吐き出されつ。しかも追風と引く潮に、誘ふ水なるくだり舟、行方も知らずなりにけり。（瀧澤馬琴――南總里見八犬傳）

瀧澤馬琴　江戸の小説家。名は解、通稱清左衛門、薙髪して篁民といふ。嘉永元年十一月歿す。小説の著頗る多し。（一七六七年―一八四八年）

一一　太郎

崋山
志士。畫家。名は靜定。三河田原侯の世臣。夙に蘭學を修む。鼎舌小說、愼機論を著し、幕府の忌諱に觸れて禁錮せられ、累を君侯に及ぼすを恐れ、天保十二年十月自殺す。(一四五三年—一五〇一年)

崋山は歸つた。

その後で、馬琴はまだ殘つてゐる興奮を力に、八犬傳の稿をつぐべく、何時ものやうに机に向つた。先を書きつづける前に、昨日書いた所を一通讀み返すのが、彼のむかしからの習慣である。そこで彼は、今日も細い行のあひだへ、べた一面に隙間もないほど朱を入れた何枚かの原稿を、氣をつけてゆつくり讀み返した。すると、何故か書いてあることが、自分の心もちとぴつたり合はない。字と字との間に不純な雜音が潛んでゐて、それが全體の調和を到る所で破つてゐる。彼は最初それを自分の癇が昂ぶつてゐるからだと解釋した。

「今の己の心もちが惡いのだ。書いてある事は、どうにか書き切れる所まで書き切つてゐる筈だから」。

さう思つて彼はもう一度讀み返したが、調子の狂つてゐる事は、前

渡邊崋山筆

と一向變はない。彼は老人とは思はれないほど、心の中で狼狽し出したのである。

「このもう一つ前はどうだらう」。

彼はその前に書いた所へ眼を通した。するとこれも亦いたづらに粗雜な文句ばかりが、糅然として散かつてゐるのみである。彼は更にその前を讀んだ。さうしてまたその前の前を讀んだ。

しかし讀むに從つて、拙劣な布置と亂脈な文章とは次第に眼の前に展開して來る。そこには何等の映像をも與へない叙景があつた。何等の感激をも含まない詠歎があつた。さうして又、何等の理路をも辿らない論辯があつた。彼が數日を費して書き上げた何回分の原稿は、いまの彼の眼から見る

と、悉く無用の饒舌としか思はれない。彼は急に心を刺されるやうな苦痛を感ぜずにはゐられなかつた。

「これは初から書き直すより外はない」。

彼は心の中でかう叫びながら、忌忌しさうに原稿を向へ突きやると、片肘ついてごろりと横になつた。

が、それでもまだ氣になるのか、眼は机の上を離れない。彼はこの机の上で、弓張月を書き、南柯夢を書き、さうして今は八犬傳を書いた。この上にある端溪の硯、蹲螭の文鎭、蟇の形をした銅の水差、獅子と牡丹とを浮かせた蒔繪の硯箱、それから蘭を刻んだ孟宗の根竹の筆立、さういふ一切の文房具は、皆彼の創作の苦に久しい以前から親んでゐる。それらの物を見るにつけても、彼は自ら今の失敗が、彼の一生の勞作に暗い影を投げるやうな、彼自身の實力が根本的に怪しいやうな忌はしい不安を禁ずる事が出來ない。

端溪の硯　支那廣東省肇慶府の東にある端溪から出る硯。

「自分はさつきまで、本朝に比倫を絶した大作を書くつもりでゐた。が、それもやはり事によると、人並に己惚の一つだつたかも知れない」。

かういふ不安は、彼の上に何よりも堪へ難い、落莫たる孤獨の情を齎した。

彼は彼の尊敬する和漢の天才の前には、常に謙遜であることを忘れるものではない。が、それだけに又、同時代の屑屑たる作者輩に對しては、傲慢であると共に、飽くまでも不遜であるのである。その彼が、結局自分も彼等作者輩と同じ能力の所有者だつたといふ事を、さうして更に厭ふべき遼東の豕だつたといふ事を、どうしてやすやすと認められようし、しかも彼の強大な「我」は「悟」と「諦」とに避難するには、餘に情熱にあふれてゐるのである。彼は机の前に身を横たへたまま、親船の沈むのを見る難破した船長の眼で、失敗した原稿

遼東の豕　後漢書朱浮傳に「漁陽太守彭寵擧レ兵攻レ浮。浮責二彭寵一書曰、伯通自伐以爲レ功、高二天下一。任時遼東有レ豕、生レ子白頭。異而獻レ之。行至二河東一見二群豕皆白一懷レ慚還。若以二子之功一論二於朝廷一、則爲二遼東之豕一也」。

を眺めながら、靜に絶望の威力と戰ひつづけた。

もしこの時、彼の背後の襖がけたたましく開け放されなかつたら、さうして、

「お祖父樣唯今」。

といふ聲と共に、柔い小な手が彼の頸へ抱き付かなかつたら、彼は恐らくこの憂鬱な氣分の中に、何時までも鎖されてゐたことであらう。

が、孫の太郎は襖を開けるや否や、子供のみが持つてゐる大膽と率直とを以て、いきなり馬琴の膝の上へ勢よく飛び上つた。

「お祖父樣唯今」。

「おお、よく早く歸つて來たな」。

この語と共に、八犬傳の著者の皺だらけな顔には、別人のやうな悅が輝いた。

宗伯　琴嶺と號す。醫を以て松前侯に仕ふ。天保六年五月歿す。（一二四五八年―一二四九五年）

茶の間の方では、癇高い妻のお百の聲や、內氣らしい嫁のお路の聲が、賑に聞えてゐる。時時太い男の聲がまじるのは、折から悴の宗伯も歸り合はせたらしい。

太郎は祖父の膝に跨りながら、それを聞きすましでもするやうに、わざと眞面目な顏をして天井を眺めた。外氣にさらされた頰が赤くなつて、小な鼻の穴のまはりが、息をする度に動いてゐる。

「あのね、お祖父樣にね」。

栗梅の小な紋付を著た太郎は、突然かう云ひ出した。考へようとする努力と、笑ひたいのを耐へようとする努力とで、靨が何度も消えたり出來たりする。それが馬琴にはおのづから微笑を誘ふやうな氣がした。

「よく毎日」。

「うん、よく毎日」。

「御勉強なさい」。

馬琴はとうとう噴き出したが、笑の中ですぐまた語を繼ぎながら、

「それから」。

「それから、ええと、癇癪を起しちやいけませんつて」。

「おやおや、それきりかい」。

「まだあるの」。

太郎はかう云つて、絲鬢の頭を仰向けながら、自分もまた笑ひ出した。眼を細くして、白い齒を出して、小な靨を寄せて笑つてゐるのを見ると、これが大きくなつて、世間の人間のやうな憐むべき顏にならうとは、どうしても思はれない。馬琴は幸福の意識に溺れながらこんな事を考へた。さうしてそれが、更にまた彼の心をくすぐつた。

絲鬢　頂を廣く剃り下げ、兩の鬢を絲の如く狹く殘して結びたる男子の髮。

「まだ何かあるかい」。

「まだね、いろんな事があるの」。

「どんな事が」。

「ええと、お祖父樣はね、今にもつとえらくなりますからね」。

「えらくなりますから」。

「ですからね、よくね、辛抱おしなさいつて」。

「辛抱してゐるよ」。

馬琴は思はず眞面目な聲を出した。

「もつと、もつと、ようく辛抱なさいつて」。

「誰がそんな事を云つたのだい」。

「それはね」。

太郎は惡戲さうに、ちよいと彼の顏を見た。さうして笑つた。

「だあれだ」。

「さうさな、今日は御佛參に行つたのだから、御寺の坊さんに聞いて來たのだらう」。

「違ふ」。

斷然として首を振つた太郎は、馬琴の膝から半分腰を擡げながら、顎を少し前へ出すやうにして、

「あのね」。

「うん」。

「淺草の觀音樣がさう云つたの」。

かう云ふとともに、この子供は家内中に聞えさうな聲で嬉しさうに笑ひながら、馬琴につかまるのを恐れるやうに、急いで彼の側から飛び退いた。さうしてうまく祖父をかついだ面白さに、小な手を叩きながら、ころげるやうにして茶の間の方へ逃げて往つた。

馬琴の心に嚴肅な何物かが刹那に閃いたのは、この時である。

冗談の中に神のさとしを見出してうなずける。

芥川龍之介　文學者。東京市の人。明治二十五年生まる。東京帝國大學英文科出身。

彼の唇には幸福な微笑が浮んだ。それと共に彼の眼には、何時か涙が一ぱいになつた。この冗談は太郎が考へ出したのか、或は又母が敎へてやつたのか、それは彼の問ふ所ではない。この時この孫の口から、かういふ語を聞いたのが不思議なのである。

觀音樣がさう云つた。「勉强しろ」「癇癪を起すな」「さうしてもつとよく辛抱しろ」。

六十何歲かの老藝術家は、涙の中に笑ひながら、子供のやうになつついた。（芥川龍之介――傀儡師）

一二　某評論者に與ふ

拜啓　あなたの書いてくれた私に關する評論は、御手紙の屆いた大晦日の晩に讀みました。それまでは忙しくて見られませんでした。あなたの論文は長いものです。又骨の折れたもの

アセニーアム Atheneum
ブライアン Bryan

です。あなたは外の人よりも私に讀んで貰ひたいといふ以上、あの論文を書いた動機のうちには、私の爲に書くといふ好意が含まれてゐます。私は自分の爲に、あなたがこれ程勞力と時間とを使つて下さつた事を感謝します。

近頃アセニーアムに私の事を書いたものがあります。私は自分のやうな者をわざわざ英國へ紹介してくれた、ブライアンといふ人の好意に對して謝せなければならんと考へてゐます。然し彼のいふ所は如何にも空虛です。一册も私の本を讀んでゐずに、好い加減な人から好い加減な事を聞いて、それを英文にしたものですから、私はそれ以上にあり難いとも何とも思ひません。然しあなたは私の書物を現に讀んでゐるのです。さうしてそれをあなたの頭で纏めたのですから、その點で私は御禮をいはなければなりません。

あなたは私を大變褒めてくれました。あなたは御世辭を使つたつもりではないでせう。あなたの眼に私がああ映ずるなら、私はえらい人かも知れません。然しあなたの纏め方はまだ足りません。書方の割合には中の方が薄い心持がします。それから書方に、大きく見えてその實しつかりしてゐない所があります。私は褒められ足りない不滿足を感ずるのではありません。あなたの纏め方や、あなたの書振にまだ足りない所があると思ひます。然しあなたは全然眞面目で書いてゐるのですから、私が今かう云つても恐らく通じないかも知れません。私は私のいふ事が、今にあなたに通ずる時機がくる事を希望し、かつ信ずるのであります。文學に專門の大家やなどの論文を見ても、外部は如何にも立派さうに見えながら、その實少しも立派でないのが澤山あります。あなたはこの方面を專門にする

人でないから、いつ廢めるか分らないと思ひますが、もし長く文壇に關係しようと思ふなら、私のいふことを參考にして下さい。さうして是等の大家の行く方向とは反對の方へ歩いて下さい。これが私のあなたに云ひ得る最上のものです。御禮をいふ傍失禮も云ひます。年長者の言葉と思つて許して下さい。

以上。（夏目漱石――漱石全集）

夏目漱石　文學者。東京市の人。名は金之助。東京帝國大學英文科出身。東京帝國大學講師たりしが、後東京朝日新聞社に入れり。大正五年十月歿す。（一八六七年―一九一六年）

莊周が夢　莊子に「昔者莊周夢爲胡蝶。栩栩然胡蝶也。俄然覺、則蘧蘧然周也」。

古今の序に　古今集の序に「花になく鶯、水にすむ蛙の聲をきけば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける」。

翁の云云　松尾芭蕉の句に「古池や蛙とびこむ水の音」。翁は芭蕉の尊稱。

やがて死ぬ云云　末句は、「蟬の聲」なり。

貧の學者云云　晉の車胤の故事。晉書車胤傳に「胤字武子。幼恭勤博覽。貧不常得油。夏月以練囊盛數十螢火照書讀之」。

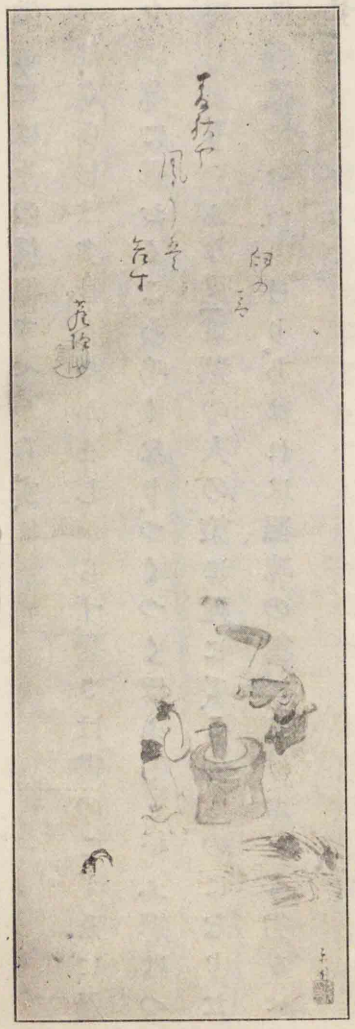
一三　百蟲譜

蝶の花に飛びかひたる、やさしきものの限なるべし。それも啼く音の愛なければ、籠に苦む身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ莊周が夢も、この物には託しけめ。

蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風しづまりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目覺しければ、このもののことと更にも謗り難し。

蟬はただ五月晴に聞き初めたるがよきなり。やや日ざかりに鳴きさかる頃は、人の汗しぼる心地す。されば、初蝶とも初蛙ともいふことを聞かぬに、このものばかり、初蟬といはるるこそ大きなる手柄なれ。やがて死ぬけしきは見えず」と、このものの上は翁の一句に盡きたりといふべし。

螢は比ふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草



也有畫讃

にすだく五月の闇は只このものの爲にやとまでぞ覺ゆる。しかるに、貧の學者に取られて油火の代にせられたるは、このものの本意にはあらざるべし。歌に螢火と詠ませざるは殊の外の不自由なり。俳諧にはその眞似すべからず。

日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝のこずゑに過ぎて、夕は草に露おくころ鳴くなり。つくつくぼふしといふ蟬はつくしなしともいふなり。「筑紫の人の旅に死にて、このものになりたり」と、世の諺にいへりけり。あはれは蜀魄の雲にさけぶにも劣るべからず。

蜘蛛はたくみに網を結んで、ひそまつて物を害せんとす。もろこしの昔には退隱の媒ともなりたれど、ひとへに奸賊の心ありていと憎し。古代朝敵の初として賴光をさへ脅したるいとおそろし。さはいへ、廢宅の荒れたる軒に、蟬の羽などかけ捨てたるは、聊かあはれ添ふる折もあらんか。彼はかひがひしく巢つくりてこそあれ、東海道に散りぼひたる宿なし者をば、くもとはいかでいふやらん。

蠶の生涯は世の爲に終り、火取蟲は誰が爲に身を焦すか。蜉蝣ははかなきためしに引かれ、蓼くふ蟲は不物ずきの謗となれり。おなじ寶の名に呼ばれて、玉蟲はやさしく、こがね蟲はいやし。

蟻は明暮にいそがしく、世の營に隙なき人には似たり。東西に聚散し、餌を求めてやまず。いつか槐安の都をのがれて、その身の安きことを得んぞ。されども、たよりあしきかたに穴を營みて、千丈の堤を崩すべからず。

蠅は歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子にあはれまる。

狗の齒に嚙まるる蚤はたまたまにして、猿の手に探らるる虱は逃るること難かるべし。

蝸牛は只水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらん。家持ちた

退隱の媒
金樓子に、「楚國龔舍、初隨二楚王一朝。宿二未央宮一、見二蜘蛛大如レ栗。四面縈二羅網一、有レ蟲觸レ之而死。舍乃歎曰、吾生亦如レ此耳。仕宦者入之羅網也、豈可レ淹レ歲。於レ是挂レ冠而退。時人謂レ之爲二蜘蛛之隱一」。

賴光
源滿仲の子。圓融天皇以下五朝に歷仕し、勇武當時に冠たり。治安元年卒す。（一一六八一年）

槐安の都
異聞集に、「淳于棼、醉夢入二大槐安國一、見レ王。王曰、吾南柯郡、屈レ卿爲レ守。居凡廿載、使者送出レ穴、遂寤。尋二古槐下蟻穴一、洞然明朗、乃槐安國。又一穴直上二南枝一、卽南柯郡也」。千丈の堤云云
韓非子に、「千丈之堤、以二螻蟻之穴一潰」。

蠅は云々
歐陽修に、「憎二蒼蠅一賦」あり。

紙魚は云云

長嘯子に、「憐ニ紙魚一詞」あり。

原、吉原　靜岡縣駿東郡原。同縣富士郡吉原。

つづりさせと　古今集、在原棟梁「秋風に綻びぬらし藤袴つづりさせてふきりぎりすなく」。

われからと　古今集、藤原直子「あまの刈る藻にすむ蟲のわれからと音をこそなかめ世をば怨みじ」。

れども行く先先を負ひ歩くは、雲水の安きにも似ず。

蛇、蚯蚓の足なくても歩むべくば、蜈蚣、をさ蟲の數おほきは不用なり。

蟷螂の痩せたるも、斧を持ちたる誇より、その心いかつなり。人の上にもこのたぐひはあるべし。

蟹の歩に譬ふべきものこそなけれ。ただ、原、吉原を駕籠に乘りて、富士を眺めゆく人には似たり。

促織、鈴蟲、轡蟲はその音の似たるを以て名に呼べり。松蟲のその木にも寄らぬに、いかでかく名を附けたるならん。毛生ひむくつけき蟲にもおなじ名ありて、松を枯し、人にうとまる。一在處に二人の八兵衞ありて、一人は後生をねがひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲のたぐひなるべし。

蟋蟀のつづりさせとは、人の爲に夜寒を敎ふるなり。藻に住む蟲

七賢　晉の嵇康、阮籍、山濤、向秀、劉伶、阮咸、王戎等、竹林の遊をなす。

横井也有　名は時般、通稱孫左衞門。尾張侯の重臣。俳道に遊び半掃庵と號す。天明三年六月歿す。(二三六二年―二四四三年)

向井去來　名は兼時、通稱平次郎。肥前の人、京都に住し、落柿舍と號す。蕉門の高弟。寶永元年九月歿す。(二三一二年―二三六四年)

はわれからと、只身の上を歎くらんを、簑蟲のちちよと呼ぶは、いと優しげなり。されど、父のみ戀ひて、などかは母を慕はざるらん。

蚊は憎むべき限ながら、さすが卯月の頃、端居めづらしき夕、はじめてほのかに聞きたる、または長月の頃、力なく殘りたる、寂しきかたもあり。蚊帳つりたる家のさま、蚊やり燒く里の煙など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜ばなしには、いかに團扇の隙なかりけん。(横井也有――鶉衣)

一四　長がたな

向井去來

○

何事ぞ花見る人のながたな。
秋風や白木の弓に弦張らむ。
應應といへどたたくや雪の門。

内藤丈草　通稱林右衛門。尾張犬山侯の重臣。蕉門の高弟。寶永元年十二月歿す。（一三二〇年―一三六四年）

春花園凡兆　加賀の人。醫を業とす。芭蕉の門人。姓名詳ならず。

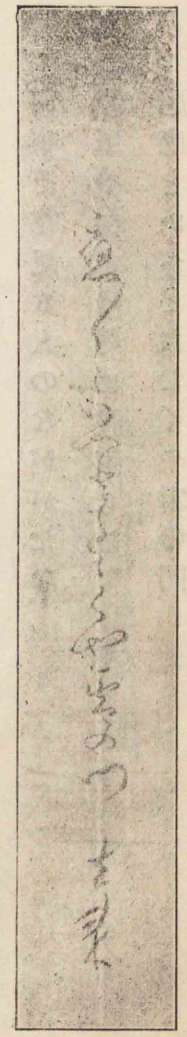
越智越人　名は氏恆、通稱七兵衛。熊本藩士。芭蕉の高弟。元祿十五年三月歿す。（一二三六二年）

椙山杉風　名は元雅、通稱鯉屋市兵衛。江戸深川の魚商。芭蕉の高弟にしてまたその保護者たり。享保十七年六月歿す。（一三〇六年―一三九一年）

志田野坡　越前福井の人。蕉門の高弟。元文五年正月歿す。（一三三一年―一四〇〇年）

森川許六　名は百仲、通稱五助、五老井と號す。近江彦根の藩士。芭蕉の高弟。正德五年八月歿す。（一三一六年―一三七五年）

各務支考　獅子庵と號す。美濃の人。蕉門の高弟。美濃派の祖。享保十六年二



去來筆

○

わが事と泥鰌のにげし根芹かな。　内藤丈草

時鳥鳴くや湖水のささにごり。　春花園凡兆

○

渡りかけて藻の花のぞく流かな。

長長と川ひとすぢや雪の原。　越智越人

○

散る時の心やすさよ罌粟の花。　椙山杉風

○

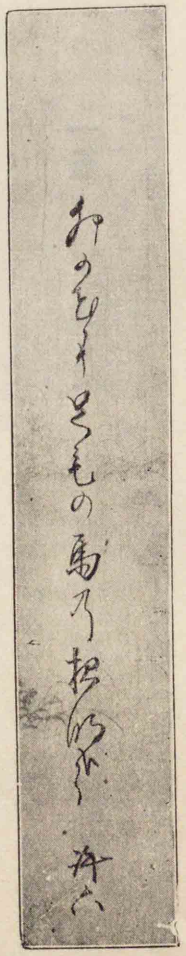
子や待たむあまり雲雀の高あがり。

○

長松が親の名で來る御慶かな　志田野坡

○

欄干にのぼるや菊の影ぼふし。　森川許六



許六筆

○

牛叱るこゑに鷸立つゆふべかな。　各務支考

○

踏みゆくや水田のうへの天の川。　惟然坊

○

浮草や今日はあちらの岸に咲く。　中川乙由

月歿す。(一三二五年—一三九一年)
惟然坊
廣瀨氏、美濃の人。芭蕉の高足。寶永七年五月歿す。(—一三七〇年)
中川乙由
通稱圖書。伊勢山田の人。初芭蕉に學び、後涼莵の門に入る。元文四年八月歿す。(—一三九九年)
岩田涼莵
名は正致。伊勢山田の神官。芭蕉の高弟。享保二年四月歿す。(一三一九年—一三七七年)
安藤冠里

○鍬さげてしかりに出るや桃の花。　岩田涼莵

○雪の日やあれも人の子樽ひろひ。　安藤冠里

樽ひろひ

一五　俚諺論

羅馬の一詩人が、エピグラムを蜜蜂に譬へて、「蜜あり、蜜あり、軀は小し」といひけるは、すべての俚諺にとはいひがたきも、その最も巧妙なるものには恰當の語なるべし。俚諺の上乘なるものは、多くはこの三者をそなふ。言短くして意義味ふべく、寸鐵人を刺すの妙あり。

名は信友、對馬守と稱す。奥州岩城平の藩主。將軍吉宗の時老中たり。享保十七年七月卒す。(一三三一年—一三九二年)
エピグラム　Epigram　警句。

人口に膾炙し易からんことを求むる故に、俚諺はおのづから律語を爲す傾あり。我が國語にては、五又は七が、自らなる律呂なれば、我が國の俚諺には、この律に從へるもの甚だ多し。「雉子も鳴かずばうたれまい」「心の鬼が身を責める」といふ如く、最もよく人口に膾炙せるものにして、七五の調子をなせるは、いと多し。「人と屏風はすぐには立たぬ」「思ふ念力岩でも徹す」「身を捨ててこそ浮む瀨もあれ」などは、七七の調子をなして、語呂頗るよし。「十で神童、十五で才子、二十過ぎてはただの人」といふも、その語に律あり。右と同じ理由により、同語または同音を重ねたる類のものも多し。例へば「多勢に無勢」「短氣は損氣」「弱目に崇目」「處かはれば品かはる」「藥九層倍」「勝つて兜の緒をしめよ」とい

大西祝

ふが如し。かく律を成し、尾韻又は頭音を合はすこと、詩の句法に似たる所あるのみならず、俚諺に抽象の語少く、おほくは具體的にいひなして、感動の强からん事を求め、又これが爲に屢誇張の言を喜ぶなども、その詩歌に似たる點なり。この故に、諺にて物の度量をいふには、その數又は量を定めていふを好む。「七たび搜して人を疑へ」、「人の噂も七十五日」、「預り物は半分の主」などの類は、數ふるに遑あらず。數の中にても最も好んで用ゐらるるは、三の數なるべし。「三度目が定の目」、「三年たてば三つになる」、「懺悔話をすれば三年の罪が滅びる」、「三人よれば文殊の智慧」、「三人よれば人中」、「朝起は三文の德」、その他なほ多かるべし。又「用心は臆病にせよ」、「黑犬にくはれて灰の和滓におそれる」などは、誇張していふによりてその意味を成せるものの例なるべし。

誇張を喜ぶと同じ理由を以て、俚諺は一見實しやかならぬ語句、

パラドックス Paradox 逆語。

卽ちパラドックスを用ゐるを喜ぶ。この種の諺に深く味ふべきもの少からず。「急がばまはれ」、「言はぬは言ふに勝る」、「逢ふは別のはじめ」、「兄弟は他人の始り」、「論語讀の論語知らず」、「人を使ふは使はれる」など、その例なるべし。かく相反するが如き事柄の中に、却つて相通ずる所あるを發見するは、深邃なる智慧の一特徵なり。

パラドックスといふにはあらずとも、總じて反對のものを相竝ぶるは、吾人の注意を捕ふる一方便なり。俚諺は總じて對照を喜ぶ。「骨折損の草臥儲」、「聞いて極樂見て地獄」、「問ふは一旦の恥、問はぬは一生の恥」、「長者の萬燈より貧者の一燈」など、その例なり。

反對を竝ぶるのみならず、總じて二種の事柄を相竝べて、そを比照するは俚諺の一大特色なり。これ俚諺の比喩に富める所以にして、その比喩の極めて妙なる、詩人の作としても恥しからぬものあり。俚諺の最も巧妙なるものは、多くこの類にあり。今思ひ出づるに

隨うて、その三四の例を掲げんか。「馬には乘りて見よ人には添うて見よ」「旅は道づれ世はなさけ」といふ如きは、幾たび唱するもその趣味の津津たるを覺ゆ。「花は櫻木人は武士」、これ我が國民の、以てそが理想を誇るに足るものの一なるべし。「佛法と藁屋の雨は出でて聞け」、風流の心に富める國民ならで、誰かこれをえいひ出でん。これを口ずさみ見よ、如何に、詩心、道心、宗教心の相結びてなせる高雅幽玄なる妙趣の浮び來らん。

かく二つの事を並べ出でて相比照することなく、唯普通の暗喩を用ゐたるものも頗る多し。例へば「商賣は牛の涎」「祕事は睫」といふが如し。而して、更にその喩のみを掲げて、他の意味を匂はせたるものも、その數多かるべし。「蟹は甲に似せて穴を掘る」「目糞鼻糞を嗤ふ」といふ如きは、この例なり。

かく、比喩の用方は數種あれど、そのこれを用ゐるは寓言に於ける用方とは同じからず。「目糞鼻糞を嗤ふ」といふ如きは、多少寓言に近寄れる所あるが如く思はるれど、俚諺と寓言とは、後者は敍事（物語）の體裁を具へ、前者は然らざる點に於いて、全く相異なり。同じく意を寓して比喩を用ゐるも、寓言はこれを出來事、又は動作として語り、俚諺は時間に結ばずして、唯常恆の事實として語るなり。

（大西祝――大西博士全集）

大西祝　哲學者。文學博士。岡山市の人。操山と號す。明治三十三年十一月歿す。（二五二五年―二五六〇年）

一六　川柳點

川柳點は實に剃刀の如きか。觸るるもの皆斷れ、近づくもの皆傷く。語句簡勁にして、直に人の肺腑に入り、諷刺骨に徹り、滑稽頤を解き、或は痛快に、或は輕妙に、或は突梯に、或は奇怪に、千變萬化、人をして應接に遑あらざらしむ。時に輕薄なる鄙俚なる調なきにしもあらねど、要するに寸にして珍なるものなり。いで、左にその二三を擧

げていひ試みん。

あがるなといはぬばかりの帳を出し。

無筆者年賀に來て御慶帳の記名に困り「さらば、來ぬ分にして下され」といひしこと、昔の笑話に見えたり。今は帳の代に、名刺受を玄關に出す。これもあがるなといはぬばかりなり。

竹の子は盗まれてから番がつき。

よくあることなり。後の祭にもあれ何にもあれ、番を附くるは附けざるに勝れり。聞きやうによりては、諷刺ともなり訓誡ともなる。

おさへれば薄はなせばきりぎりす。

形容の妙を曲盡せり。蘇東坡が「餓蛟取渇虎」と書きしを、いみじき手がらのやうに驚ける人、もしこの句を見ば何とかいはん。

本降になつて出てゆく雨やどり。

道灌の「いそがずば濡れざらましを」の歌と一對の巧語。急ぎてもわ

詩と異なる所は終りが連用止めなること。

蘇東坡　宋の文豪。名は軾、洵の長子。眉山の人。英宗神宗哲宗に歴事し、翰林學士兼侍講に至る。（西暦一〇三六年―一一〇一年）

道灌の云云　太田道灌の歌に「いそがずばぬれざらましを旅人のあとよりはるる野路の村雨」。

るし、急がでもわるし。とにかく考物なり。

提燈が消えて座頭に手を引かれ。

その矛盾がをかしきなり。塙檢校が「さてさて目あきは不自由な」といひしに似たり。

片假名に四角な文字は手を引かれ。

漢文に、捨假名、反點の、左右にうるさく附き纏へるさま、譬へ得て妙。昔のヲコト點ならんには「四角な文字に炙をするぞ」ともいはばいふべし。

手紙には狸臺には鯉を載せ。

手紙を見て肝を潰し、臺を見て胸撫でおろすらんをかしさよ。近來は、中等教育を終へたる者の文章にも、狐を馬に乘せたる類のこと多し。あながちにこの狸をのみ笑ひ難くや。

名物を食ふが無筆の旅日記。

腹のふくるる日記かな。食ふより外に能なき人間を罵倒し得て痛快。

泣く泣くもよい方を取る形見わけ。

人情の弱點を穿ち過ぎて、餘に酷なる心地す。しかし事實なるをいかにせん。かの赤穗の城渡の際、お金配分に高割を唱へし小野九太夫は、この露骨なるものか。

小野九太夫　假名手本忠臣藏に出づ。

初代川柳

かくの如く、川柳點は尋常茶飯の出來事を捉へて、よく滑稽化するのみならず、又最も眞面目なるべき故事、傳說、史實等を題目として、その縱橫自在なる口吻を弄せり

戸隱　信州戸隱山なる戸隱明神。手力雄神を祀る。

戸隱も神樂のあひだ髭をぬき。

岩戸の細目に開くまでは、用のなき戸隱明神なるを思ふべし。鑛に

能因　歌僧。俗名橘永愷。攝津古曾部に居り、世に古曾部入道と稱す。

袋草紙　四卷。藤原清輔の著。歌學の書。

忠盛　平氏。清盛の父。（一七五六年―一八一三年）

隼太　賴政の郎等猪隼太。

盛衰記　源平盛衰記なり。四十八卷。

賴政　源氏。仲正の子。射を善くし、和歌に巧

髭ぬくひま人の所作を、神代に附會したる、働あり。

御紀行拜見に能因は當惑し。

なまじひに名歌を詠みて、苦勞をまうけたるは能因なり。天日に焦して顏だけは黑めたれど、紀行までは手が屆かずやありけん、物にその沙汰なし。作者のつけ目は此處なり。但袋草紙に「一度においては實か。八十島の記を書けり」とあり。何時も室內旅行家にはあらざりけらし。

忠盛の高名の場を犬がなめ。

抱きとめたるは油坊主なるを思ふべし。わざと聯想の一階を飛び越して、高名の場を嘗めたりといへる滑稽突梯、まことに及び易からず。

その暗さ隼太櫻に衝きあたり。

盛衰記の、賴政鵺を射る條に、「黑雲とは見たれども、天は實に暗し。い

なり。晩年剃髪し世に源三位入道と稱す。治承中以仁王を奉じて兵を擧げ、敗れて宇治平等院に自殺す。（一一八四〇年）

時致　曾我五郎。河津祐泰の子。建久四年兄祐成と共に父の仇工藤祐經を斬る。（一八三四年―一八五三年）

祐成　曾我十郎。河津祐泰の長子。建久四年父の讐工藤祐經を斬り、終に仁田忠常に殺さる。（一八三二年―一八五三年）

大磯　神奈川縣中郡大磯町。

佐野　源左衞門常世。謠曲鉢の木に出づ。

戸塚の阪　神奈川縣鎌倉郡。

道風　小野氏。書家。三蹟の一。（一五五六年―一六三六年）

文王　周の武王の父。

太公望　呂尙といふ。文王武王を輔け、天下を一統せしむ。

金子元臣　歌人、國學者。

づこを射るべしと矢所さだかならず」とあり。乃ち郎等隼太が左近の櫻に鼻衝きあててまごまごする、一場の喜劇を案出し來れるなり。作者はいかなるへうきん者ぞ。

時致は鞭をかじつて息をつぎ。兄祐成が急を救はんとて、途に百姓の駄馬を奪ひて大磯に驅けつくるは、曾我の物語中出色の快譚なり。これを圖にして、大根の鞭を添へたるは畫工の氣轉なり。せきにせいたる息やすめに、その大根を嚙らせたるは、この作者の氣轉なり。

佐野の馬戸塚の阪で二度ころび。戸塚の阪は鎌倉入の一難處。元來乘力なき源左が瘦馬、さぞや越えなづみしならん。さるを二度まで轉びたりと誇張したるに、大いなる可笑味を生ず。

芭蕉は飛びこみ道風は飛びあがり。

湊合の妙を見る。主題の蛙をいはで、突然に仕立てたるところに一種の面白味あるなり。

釣れますかなどと文王そばに寄り。流石の聖人文王と、奇傑太公望との邂逅も、話の口火を切るには極めて平凡ならざるを得ず。ただ「などと」の語、胸に一物ある趣を狀し來りて、幾多の波瀾あるを覺ゆ。（金子元臣）

一七　みとり日記

六日。天晴れたれば、臥してばかりも退屈にや思しめさんと、夜著うち疊みて寄り懸らせ申したるに、來し方の物語などはじめ給ひけり。「抑汝は三歳の時母に後れ、やや長くるにつけても、後の母との中睦じからず。日日魂をいため、夜夜心火をもやし、心の安き時はなかりき。ふと思ひけるやうは、一緒にありなばいつまでもかくあり

御歌所寄人。國學院大學教授。慶應大學講師。東京市の人。明治元年十二月生まる。

五逆罪　佛教にて、殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血をいふ。

なん、一たび故郷をはなれたらんには、慕しき事もやあらんと、十四歳といふ春、遙遙江戸へとは赴かせたりき。あはれ餘所の親は、今三とせ四とせ過ぎたらんには、家を任せ、汝にも安堵せさせ、我等も行末を樂むべきに、年はもゆかぬ痩骨に荒奉公せさせしを、つれなき親とも思ひつらん。みなこれ宿世の因緣と諦めよや。我も一たびはかの地に越えて汝にめぐり逢ひ、相果てんにも汝が手を借らんと思ひしに、この度遙遙と來りて、かかる看病を受くるこそ淺からざる緣なれ。今は往生遂げたりとも何の悔かあらん」と、はらはらと涙を落し給ふに、我はただうち伏して物をもえいはず。夏も消えやらぬ富士の雪より厚く、紅の色より深き父の恩を、附き添ふこともならで、ただ浮める雲の如く、東にあるかと思へば西に漂ひ、光陰は阪の上に輪を轉すが如く、今年二十五年になりぬ。頭は白き霜を戴くまで親の側を遠ざかりぬること、五逆罪といふともこれに過ぎなんやと、心に伏し拜み、われ涙を落しなば、病いよいよ重らせ給ふべしと、顏おし拭ひてうち笑ひ「さる事心に思ひ給はで、はやはや快氣なし給へ」と藥をすすめ「やがて健になり給はば、我ももとの彌太郎となり、草刈り土掘りて御心を安んじ參らすべし。今までの體たらく許させ給へ」といへば、父は限なく喜び給ひぬ。

一茶自畫像

八日晴。田休みなればとて、所緣あるも所緣なきも、聞き傳へ語り傳へて、訪ひ來る人も多かり。父が好物なりとて、酒もて來る人もあ

身後云云
白氏文集に「身後堆レ金柱二北斗一。不レ如二生前一杯酒一」。

鷄の空音云云
史記孟嘗君傳に「昭王釋二孟嘗君一。出至二函谷關一、關法鷄鳴出レ客。客有下爲二鷄鳴一者上、鷄悉鳴。於レ是開レ關出レ之」。

り、蕎麥粉もて來るもあり。父は喜しげに首をもたげ、手を合はせて、ほどほどに會釋し給ひぬ。「身後黃金北斗にささふとも、如かじ生前一杯の酒」と、唐も大和も人の情等しく、亡きあとにて佛事供養美美しく盡したらんより、存命のうちの優しき言葉ぞまさるべき。今は世降りて、他の一寸の盃は咎めて、おのれが一尺のひがみは見えず。よろづうしろめたきがちにて、我が身不孝なりと思へる人だになし。

うけがたき人と生まれてなよ竹の
すぐなる道に入るよしもがな。

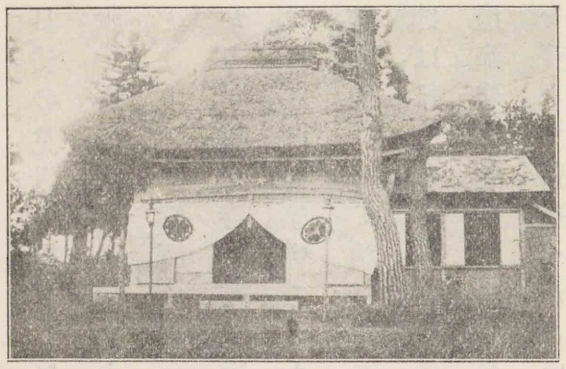
この夜は子一つの頃より寐られねば、夜長うおぼして「まだ夜は明けぬか、鷄の啼かざるか」と、我に聞き給ふこと三度、四度、七度、九度に及べども、ただ星あかりのみにして、軒のつまの樅、楓の樹かげ、其處に彼處に暗く、梟の夜更をうたふばかりなり。あはれ鷄の空音をつ

入日を返す勢
淮南子に「魯陽公與レ韓構レ難、戰酣方暮、援レ戈而撝レ之、日爲反三舍」。

善光寺
今の長野縣長野市。名刹善光寺ある故にいへり。一茶の鄉里柏原より約八里餘。

くりて、關の戸を開きしためしはあれど、夜のほがらかになるは天のなす業にして、火を袋に入るる幻術は知らず、入日を返す勢はたあらねば、ただ燈火をかかげて寢顏を守るばかりなり。

十日晴。頻に梨の實をたうべたしとむづかり給へば、このあたりの所緣あるも無きも、親しきかぎり、富みたる家、心あたりある門、聞きつくし尋ね探し盡すといへども、ありの實一つ貯へたる人とてなく、夏さへ寂しき山里なり。今日はわけて宣ふなれば、善光寺へ往きてみんと、曉に支度して門を出でけるに、皐月の空ほのぼの晴れて、白雪はた山にあり。青葉がくれの花は春を殘して、種蒔の山入など懷しく、時鳥の



一茶の舊居

牟禮　水内郡牟禮村。

一聲もこよなく時めく空なるに、あやしく心の晴れぬ曙なりけり。卯の下刻、牟禮といふ驛に至る。こはそのかみ、われ江戸へ赴きける日、父の見送り給ひし里にて、今は二十四年の昔となりにき。川の音、阪の影も仄に心覺ありて、何となく嬉しけれど、人は知らぬ顏のみとなりけり。醫師の家に居ますうちにと足を早めければ、辰の刻ばかりに善光寺に著く。醫師はまだ朝飯頃と見えて、主人の聲も聞えければ、いそぎ病のさまを語りけるに、やがてから樫の匙取りつつ、御藥合はせて給ひたり。そもそもこの地は御佛の淨土にしあれば、肆は軒をあらそひ、幌は風にひるがへり、入る人出づる人、國國より遙遙歩を運びて、未來の成佛を願はぬ人なし。おのれは今日父の命を受けて、御藥つかひ、はた梨さがしに來つるなれば、この役濟まざらんうちはと、御佛も遙拜して、天をかけり地をくぐりてなりとも、梨一つ得まほしく、ある程の乾物店、ある程の青物店を、足を空にし

雪中に筍を掘り　吳志に「孟宗母嗜レ筍。冬節將レ至筍尙未レ生。宗入ニ竹林一哀歎、而筍爲レ之出、以供レ母」。

氷上に魚を求め　晉書に「王祥性至孝。繼母朱氏不レ慈、而祥愈恭謹。父母疾衣不レ解レ帶、湯藥必親嘗。母嘗欲ニ生魚一、時天寒水凍、將ニ剖レ氷求ヲ之、氷忽自解、雙鯉躍出」。

吉田　水内郡吉田村。

高出

て驅けめぐるに、悲しきは、さらに片割一つありといふ人もなし。昔雪中に筍を掘り、氷上に魚を求めしためしもあるに、梨一つ得る能はざるは、皇天我を捨て給ふかや、佛神我を見かぎり給ふかや、一世ばかりの不孝にはあらじ、父はさぞ梨を待ち居給はん、この儘に歸りて父をなにとか慰めんと思へば、胸ふさがりて、落つる涙は大道を潤すに、往來の人の狂者と笑はんも恥しく、暫く手を組み首をうなだれて、心をぞ沈めける。この地に無き物、いづちにかあらん、ただ一足も早く戻りて、藥を進め奉らんと、手を空しうして吉田といふ里に來つるに、樹立の山鴉三つ四つ、我を見ては聲をたつるに、何となく父の身の上の心にかかり、息もつきあへず足を早むるほどに、日影は八つ時といふ頃宿に戻る。父はいつもより顏うるはしく笑を含み給ふに、梨を得ざる事を語らば、またもや氣を落し給はん、とやせんかくやせんとためらふに、父の問ひ聞き給へば、ありのまま

を答へ、高田へ參りて尋ね來り參らすべしと、白雲のよすがも知らぬ根無し言を申して父を宥め奉りぬるは、いと本意なき夕なりけり。（小林一茶――みとり日記）

今の新潟縣高田市。柏原より約二十里。

小林一茶　信濃の俳人。俳諧寺と號す。江戸に住むこと十餘年。文政十年十一月郷里柏原に歿す。（一四二三年―一四八七年）

名取川　宮城縣宮城郡。古來の歌名所なり。

仙臺　今の仙臺市。當時伊達侯の城下。

宮城野　今宮城郡原町の生巢原にその名殘る。

玉田横野　宮城郡原町小田原の麓の地の舊名といふ。

つつじが岡　仙臺市街の東偏にあり。

みさぶらひ云云　古今集東歌「みさぶらひみ笠と申せ宮城野の木の下露は雨にまされり」。

藥師堂、天神の御社　共に躑躅が岡にあり。

壺の碑　多賀城碑を誤れるなり。

一八　奥の細道

名取川を渡りて仙臺に入る。菖蒲葺く日なり。旅宿を求めて四五日逗留す。ここに畫工加右衞門といふものあり、聊か心あるものと聞きて知る人になる。このもの、年頃さだかならぬ名所を考へ置き侍ればとて、一日案内す。宮城野の萩茂りあひて、秋の氣色思ひやらる。玉田横野、つつじが岡は馬醉木咲く頃なり。日影ももらぬ松の林に入りて、此處を木の下といふとぞ。昔もかく露深ければこそ、「みさぶらひみかさ」とは詠みたれ。藥師堂、天神の御社など拜みて、その日はくれぬ。なほ松島、鹽竈の處處繪にかきて贈る。かつ紺の染緒つけたる草鞋二足餞す。されば、こそ風流のしれもの、ここに至りてその實をあらはす。

あやめぐさ足に結ばん草鞋の緒。

かの繪圖にまかせてたどり行けば、奥の細道の山際に十符の菅あり。今も年年十符の菅菰を調へて國守に獻ずといへり。

壺の碑は市川村多賀城にあり。高さ六尺餘、横三尺ばかりか。苔を穿ち文字幽なり。四維國界の里數をしるす。「此城神亀元年按察使鎮守將軍大野朝臣東人之所置也。天平寶字六年參議東海東山節度使鎮守府將軍惠美朝臣朝獦修造也。十二月一日」とあり。聖武皇帝の御時に當れり。昔よりよみ置ける歌枕多く語り傳ふといへども、山崩れ川落ちて道改り、石は埋れて土にかくれ、木は老いて若木にかはれば、時移り代變じてその迹たしかならぬ事のみなるを、ここに至つて疑なき千歳の記念、今眼前に古人の心を閲す。行脚の一德、存命

の悦、羈旅の勞をわすれて涙も落つるばかりなり。

それより野田の玉川、沖の石を尋ぬ。末の松山は寺を造りて末松山といふ。松の間間みな墓原にて、翼をかはし枝を連ぬる契の末も、終はかくの如しと悲しさもまさりて、鹽竈の浦に入相の鐘をきく。

五月雨の空聊か晴れて、夕月夜幽に、籬が島もほど近し。蜑の小舟漕ぎつれて肴わかつ聲聲に「つな手かなしも」と詠みけん心も知られていと哀なり。その夜、盲法師の琵琶をならして奥淨瑠璃といふものを語る。平家にもあらず、舞にもあらず、鄙びたる調子うち上げて、枕近うかしがましけれど、さすがに邊土の遺風忘れざるものから、殊勝に覺えらる。

芭蕉

早朝鹽竈の明神に詣づ。國守再興せられて、宮柱ふとしく、彩椽きらびやかに、石の階九仞にかさなり、朝日朱の玉垣をかがやかす。かかる道のはて塵土の境まで、神靈あらたにましますこそわが國の風俗なれと、いとたふとし。神前に古き寶燈あり。かねの戸びらの面に、「文治三年和泉三郎寄進」とあり。五百年來の俤今眼の前に浮びて、そぞろに珍し。かれは勇義忠孝の士なり。佳名今に至りて慕はずといふ者なし。誠に人はよく道を勤め義を守るべし。名もまたこれに從ふ。日既に午にちかし。船をかりて松島にわたる。その間二里餘、雄島が磯につく。

芭蕉筆

そもそもこと舊りにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、およそ洞庭、西湖をはづかしむ。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の

野田の玉川、沖の石　共に宮城郡。

末の松山　宮城郡多賀城村大字八幡の砂丘をいふ。

つな手かなしも　古今集東歌「陸奥はいづくはあれど鹽竈の浦こぐ船のつな手かなしも」。

鹽竈の明神　陸前國鹽竈町にあり。

國守再興　元祿二年伊達綱村造營。

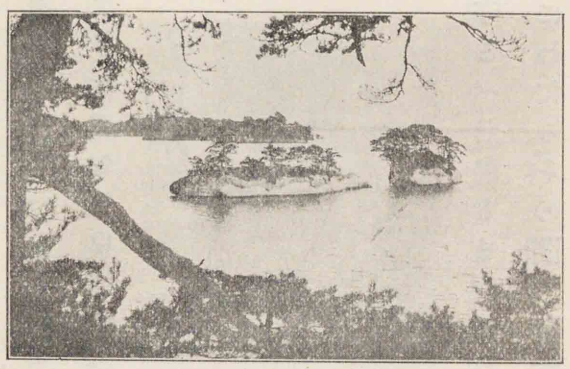
和泉三郎　藏原忠衡。秀衡の第三子。泰衡等父の遺命に背きて源義經を討たんとす。忠衡獨聽かず、血戰して死す。（一一八四九年）

洞庭　支那第一の大湖。湖南省の北部にあり。

西湖　支那浙江省杭州府城の西にあり。

浙江　支那浙江省杭州府にあり。

潮をたたふ。島島のかずを盡して、敲つものは天を指し、臥すものは波に匍匐し、あるは二重にかさなり三重に疊みて、左にわかれ右につらなる。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するがごとし。松の綠こまやかに、枝葉汐風にたわみて、屈曲おのづから矯めたるが如し。その氣色窅然として、美人の顏を粧ふ。ちはやぶる神代のむかし、大山づみのなせる業にや。造化の天工、いづれの人か筆をふるひ詞をつくさん。



松島

雄島が磯は地つづきて海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の迹、坐禪石などありぬ。また松の樹蔭に、世を厭ふ人なるべし、落穗、松笠などうち煙りたる草の庵しづかに住みなせり。いかなる人とは知られずながら、

雲居禪師　元和の頃の名僧。

まづ懷しくて立ち寄るほどに、月海にうつりて、晝のながめ復あらたまりぬ。江上に歸りて宿を求むれば、窓をひらき二階を作りて、風雲の中に旅寢するこそ怪しきまで妙なる心地はせらるれ。

曾良

松島や鶴に身をかれほととぎす。

余は口を閉ぢて、眠らんとするにいねられず。

十一日瑞巖寺に詣づ。當寺三十二世の昔、眞壁平四郎出家して入唐、歸朝ののち開山す。その後に雲居禪師の德化に依りて、七堂甍あらたまりて、金碧の莊嚴光を耀し、佛土成就の大伽藍とはなれりけり。かの見佛聖の寺はいづくにかと慕はる。（松尾芭蕉――奥の細道）

曾良　信濃の人。河合氏、通稱惣五郎、宗悟と號す。芭蕉の門人。寶永七年五月歿す。（一三〇九年―一三七〇年）

瑞巖寺　松島村にあり。禪宗。

眞壁平四郎　法名を法身といふ。見佛聖　天仁の頃の僧。雄島に住す。

松尾芭蕉　俳人。正風の祖。名は宗房、通稱忠左衞門、桃青と號す。伊賀上野の人。江戸深川に住む。北

一九　郷土の魅力

甚だ陳腐な事のやうであるが、郷土といふものの、人間の心を惹きつける作用は不思議なものである。一方に、

村季吟に學び、西行の風を慕ふ。元祿七年十月大阪に歿す。（一六三〇—一六三五年）

伊陽　伊賀のこと。

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老を迎ふるものは、日日旅にして旅をすみかとす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年より か、片雲の風にさそはれて漂泊のおもひやまず。

といひ、或は、

羈旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なん。これ天の命なり。

などといつてゐた、かの芭蕉翁でさへ、他方に於いては

代代の賢き人人も、古郷は忘れ難きものにおもほえ侍るよし。我今は初の老も四とせ過ぎて、何事につけても昔のなつかしきまに、はらからのあまた齡傾きて侍るも見捨てがたくて、初冬の空のうちしぐるる頃より、雪を重ね霜を經て、師走の末伊陽の山中に至る。猶父母のいまそかりせばと、慈愛のむかしも悲しくおもふ事のみあまたありて

柏原　水内郡。

良寛和尚　歌僧。越後出雲崎の人。天保二年寂す。（一七五八年—一八三一年）

舊里や臍の緒に泣くとしの暮。

などといつてゐる。

故さとは蠅まで人をさしにけり。

故さとは西も東も茨の花。

僧　良寛

といつた風に、永い間自分の故郷を呪つて旅から旅へと漂泊してゐた、あのすね者の俳諧寺の一茶ですら、晩年には「これがまあつひのすみ處か雪五尺」などと驚きながらも、その雪の深い信濃柏原の郷里に歸り住んで、そこで一生を終へた。

更に、かの近世稀有の聖僧と云はれる越後の良寛和尚の如きも、二十二歳から四十三歳までの二十餘年間の雲水行脚の旅にあき

たらないで、それ以來、ずつと越後の郷里に孤獨な庵住生活をつづけて、靜な往生を遂げてゐる。

故さとへ行く人あらばことづてむ
けふ近江路をわれ越えにきと。

草まくら夜ごとにむすぶやどりにも
結ぶはおなじふるさとの夢。

などいふ彼の旅中の歌を讀んでも、いかに彼が故郷を慕ふおもひの切なるものであつたかを察することが出來る。

二十三歳で妻子を振り棄てて佛門に歸し、諸國修行の旅に出た西行も、

柴の庵のしばし都へかへらじと
思はむだにもあはれなるべし。

世の中を捨てて捨てえぬ心地して

西行　歌僧。俗名佐藤義清。鳥羽上皇に仕へ北面の武士となり、左兵衛尉に任ぜらる。後出家し、行脚して足迹天下に遍し。建久元年二月京都に寂す。（一七七八年―一八五〇年）

都離れぬ我が身なりけり。

など歌つて居り、且晩年には都に歸つて死んだ。

良寛筆

かういつた風に、昔から代表的な漂泊の人人として知られた此等脱俗の人人さへも、不思議に彼等の生まれ且育てられた郷土に對しては、しかく切なる愛慕の情を持つてゐた。抑この郷土の人間に對して持つてゐる魅力は、どこから來るのであらうか。

それは全く「何とはなしに」である。理知的判斷によるのでもなく、功利的見地からでもなく、或は特に美的判斷の然らしむるといふでもなく、それはただ「何とはなしに」

である。鄉土の人心を惹きつける魅力は、實にこの何ともいひあらはされないところから發する。それは自然と人間と、過去と現在とを一つに融した一種不思議な、音樂的な魅力である。また私達が鄉土を慕ふ心は、全く自分にもよくわからない內心自發の情緒である。いかなる力を以てしても否定しがたい本然的情緒である。この不可思議なる情緒の存在してゐる事實は、おそらく如何なる理知の人と雖も、否定することは出來ないであらう。

けれども、今の時代には、追追この自分の鄉土といふものを失ひかけてゐる人が多くなつてゐることも、亦明な事實である。

私は常に、漁夫に取つては、海は單に彼等に生計の資を與へる爲のみの場所でなくして、又實に彼等に取つての、貴い心の糧を與ふる領土であると思つてゐる。まつたく漁夫ほど海を愛することの切なる者はない。海は彼等に取つては離れがたい心の世界である。

農夫に取つて、山野、田畑が單に彼等の生計の資を得る場所でないと同じである。

愛慕すべき鄉土を失ふことは、同時に心靈の故鄉を失ふことである。漁夫にとつて海は單に生計の資を得るのみの場所と考へられる時、漁夫は卽ち心の故鄉を失ふのである。農夫が山野、田畑を生活の爲の資を得る場所とのみ考へる時、彼等は心靈の鄉土を失ふのである。

幾度も引合に出す言葉であるが、私にはどうもエマソンの自然論の中の左の一節は忘れがたい。

樵夫の伐る一箇の材木と、詩人の見る樹木との間に區別を生ずる。私が今朝見た愛すべき風景は、疑もなく二十三十ほどの農圃から成り立つてゐる。誰はこの畑を所有し、彼はかの畑を所有し、また某は向の森林地を所有してゐる。然し、彼等の中誰一人もこ

エマソン　亞米利加の哲學者、詩人。もと牧師たりしが、轉じて專ら文學に從事せり。（西曆一八〇三年―一八八二年）
Ralph Waldo Emerson

の風景を所有するものはないのである。蓋し地平線の中には、あらゆる部分を全きものに統べて觀ることの出來る眼を持つた者の外には、何人も所有せぬ一つの財産がある。卽ちかくの如き人は詩人である。この財産こそ、此等三人の農圃に於いて最も優れたものであるが、彼等の所有證明書は、この財産に對しては何等の權利を與へぬのである。

このエマソンの所謂二つの心をあはせ持つた人人が、最も幸福な農夫であり、樵夫であり、漁夫であり得ると私は思ふ。樹を材木として伐る樵夫は、同時に樹木を全き一つの物として眺め得る詩人であるのに、何の差間があらう。海をすなどりの場所とすると同時に、そこを心の郷土として愛することの出來る漁夫が、最も幸福な漁夫であるべきである。

郷土に定住して、さういつた幸福を見出し得る人は、眞に郷土を

有する人だとも云へる。私達はさう云つた人人の生活が最も懷しく思はれる。

自然は何といつても私達の心の故郷である。脚氣患者が郷里に歸ることによつて、何時となしに健康を恢復することが出來るやうに、私達の傷ついた心は、魂は、心の底から自然を愛し自然に懷しむことによつて、その健康を取りもどす事が出來る。

自然を魂の郷土として懷しむことの出來る幸福を、私達は永遠に失ひたくない。私達は自分にも、また自分の子ども達にも、永遠に「郷土」の有する魅力を失はせたくはない。それは私達のための搖籃であつて、また墳墓であるべきである。

（相馬御風——對山雜記）

相馬御風　文學者。名は昌治。新潟縣の人。早稻田大學英文科出身。

二〇　國體の精華

わが日本固有の國體と國民道德との基礎は、祖先敎に淵源す。祖

先教とは祖先崇拜の大義をいふ。わが日本民族の固有の體制は血統團體なり。血統團體とは、民族がその同始祖を敬愛するによりて共存團體を成し、祖先の威力に服從するによりて平和の秩序を維持するをいふ。小にしては家を成し、大にしては國を成すものなり。祖先崇拜の大義は血統團體を構成し、維持する原由たると同時に、血統團體の存續は、また祖先崇拜の大義を鞏固にし、深遠にする效果あり。二者相俟ちて消長し、須臾も離るべからず。而して、わが固有の國民道德たる忠孝、友和、信愛の道は、一に皆祖先崇拜の大義に淵源し、血統團體を保持する軌轍たり。わが堅固なる家國の體制は祖先教の基礎に存し、これを千古に建て、これを萬世に傳ふるはわが民族の特質にして、わが國體の精華たるなり。

人は孤立獨存し得べき者にあらず。共同團結以てその生存を全うす。而して、その團結する原由と形體とは固より一ならず。但利害を以て集散し、約束を以て協和を維持するものは、その團結固からず、又久しからず。利害の異同は、生活の狀況に隨ひて時に變轉し、人爲の約束は、また人爲を以て解除せらるるを免れざればなり。血統相依るは自然の團結なり。兒孫が父母の保護の下に團欒するは社會の初にして、民族が同始祖の威靈の下に國を成すは天賦の團結なり、血脈相通ずるは天然の連鎖なり。人爲を以てこれを絶つことを得ず。利害の觀念の外に超越し、敬愛の至情に由り、離るべからざる共同生存を成す者は血統團體なり。

血統はこれを祖先に受け、これを子孫に傳ふ。故にその團結は永久なり。血統關係は利害を以て離合斷續するを得ず。故にその團結は鞏固なり。而してこれを統一するは祖先の威力なり。子孫の祖先の威力に服從するは、對等の約束ならざるが故に、敬愛の情厚く、忠順の念深し。家に在りては、家長は祖先の威靈を代表し、家族に對し

て家長權を行ひ、國にありては、天皇は天祖の威靈を代表し、國民に對して統治權を行ふ。家長權と統治權とは、共に、君父がその祖先の慈愛する子孫を、祖先の威靈に代りて保護する權力なり。

吾人の今日あるは、吾人の祖先が血統團體を建設し、維持し、遺傳したる餘慶なり。何が故に血統相近き者が相依りて家を成し、民族を成し、又國を成したるか。そは祖先を崇拜し、その威力と慈愛との下に、生存の保護を全うせんと欲する天性の至情に外ならざるなり。汝の父母を敬愛し、その慈愛なる保護の權力に從順なる至情は、延いてこれをその父母の父母に及すべし。吾人の祖先の祖先は、卽ち畏くもわが天祖なり。天祖は國民の始祖にして、皇室は國民の宗家なり。父母拜すべし、況や一家の祖先をや。一家の祖先拜すべし、況や一國の始祖をや。家長の位は祖先の靈位にして、皇位は天祖の靈位なり。父母は現世に在る祖先なり。天皇は現世に在る天祖なり。父母に孝なるべき所以は、卽ち皇室に忠なるべき所以にして、これを一貫する國教は、卽ち祖先の崇拜なり。この大義は、吾人の祖先が國家を成したる基礎にして、吾人がこれを永遠に維持する軌道たるものなり。

人は信仰によりて動作す。限定せられたる人智は、宇宙の現象を總合して、これをその根柢の眞理に證明し、絶對の理法を自覺して行動すること能はざればなり。吾人の祖先は、肉體の外に不死の靈魂あることを確信し、又子孫を慈愛する父母の威靈は、顯界においてその肉體は亡ぶれども、尙幽界に在りてその子孫を保護することを確信したり。これ祖先崇拜の大義の淵源にして、敬神のわが國教たる所以なり。わが固有の國體、民俗、祖先の祭祀を重んずるより重きはなし。家は祖先の威靈の住む處、國は天祖の威靈の住む處にして、祖先の威靈は國家を防護す。吾人は祖先の生命の繼續にして、

子孫は吾人の生命の延長なり。祖先の祭祀を不朽に絶たざるは、吾人の肉體において代表せらるる祖先の生存を永遠に傳へんと欲するなり。祖先と吾人と子孫とが、國家の觀念において同化す。祖先の靈位を現世に代表する君父に忠孝なるは、祖先に忠孝なるなり。君父が臣子を愛護するは、祖先がその子孫を愛護するなり。夫婦の和、兄弟の友、民族の共愛、すべて皆家國の鞏固にして、永久なることを欲する祖先の遺志に適從する道ならざるはなし。わが祖先崇拜の大義は國民の確信に出で、不朽の國體はこれによりてその基礎を立て、國民の道德はこれによりて深厚を加ふ。萬世に亙りて、この國、この民を保持するものは、この國體の精華たるわが固有の祖先教の力なり。（穗積八束）

穗積八束
憲法學者、法學博士。愛媛縣の人。東京帝國大學法科大學教授、法科大學長、貴族院議員たりき。大正元年十月薨ず。（一五二〇年―一五七二年）

二　神戰

日光
栃木縣上都賀郡。

中禪寺
日光町より三里。

湖
中禪寺湖、一名を幸湖といふ。風光甚だ佳し。

男體山
日光山中の最高峯、一に黑髮山といふ。

湯元
中禪寺湖の西三里餘。溫泉あり。

庚申山

日光はちやうど紅葉の頃であつた。第一日は中禪寺まで伸して湖畔の宿に入つた。座敷からの湖面には、夕の男體山が一杯に影を落して、秋風が渡ると、その上に銀の泥引が一條二條また三條と引かれた。床に入つて、明日の湯元への道を案內記に辿つて見ると、途中の戰場が原の處に、「昔神戰のあつた場所」とある一節が、自分の胸に不思議と强く響いて來た。だが、その神戰といふ意味には何の說明も無かつた。

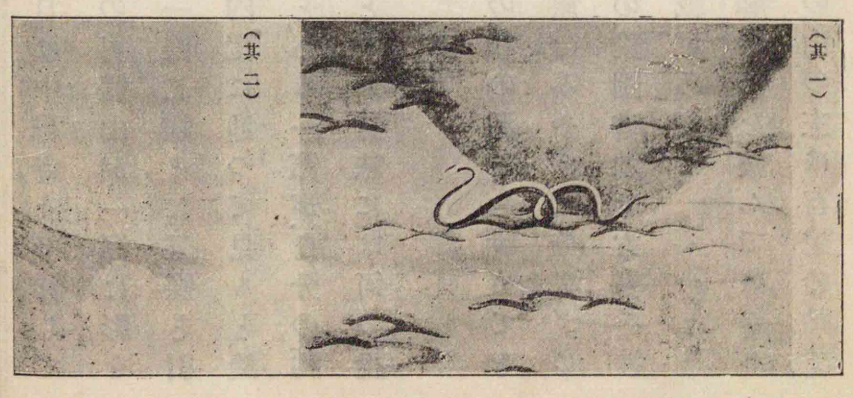
明けてその戰場が原を拔け、湯元の溫泉の秋の深さを眺めてそのあくる日に又來た道を引き返した。この旅のみやげは、分らずじまひに持ち歸つた神戰の二字であつた。その後圖書館で古書を涉獵して見ると、扶桑略記にそれの詳細な記載があつた。

昔男體山に蛇身の女神が棲んでゐた。中禪寺湖を挾んではるか向の上州には庚申山が對立してゐるが、その山の主は百足の神で

群馬縣山田郡。

あつた。この二柱の神樣は領地爭で敵同士であつた。然し戰爭となると、敗ける方はいつも男體山の女神であつた。やがては段段に領地を狹められて、自分の棲む土地も氣づかはれる狀態にあることを虞れてゐたが、女神は或時雲中からの神の告を受けた。

雲中に示現があつて、「陸奥に弓をよく射る獵夫がある。それの救を得れば、今度の戰には、きつとお前の方が勝利である」と聞えたので、女神は喜んで、白鹿と化して陸奥を訪ねた。あちこちと、これは獲物の方から獵師を尋ねてゐると、ある森林



（其一）

（其二）

でその人にばつたりと出會つた。然し鹿がそこで人間に挨拶するのも變なものだが、傳說では、鹿が挨拶もしないで一目散にもと來た方角へ逃げ出したとなつてゐる。白鹿を見つけた獵夫は何で見逃さう。何處までもと矢を番へて追つて往つた。鹿の逃脚が早いので、その矢を遂に放つ折が無くて、そのままとうとう下野の國まで追つて來てしまつた。白鹿は自分の繩張まで來ると、鹿の皮を脫いで女神の姿になつてしまつた。そして吃驚してゐる獵夫に近づいて、

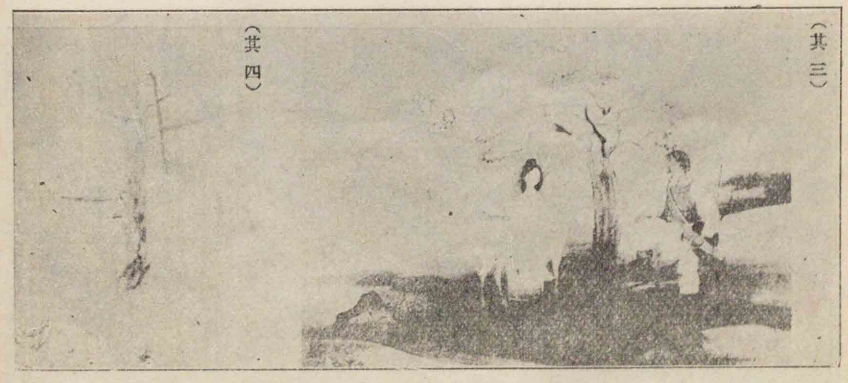
「實は自分はこの邊を支配してゐる神

であるが、かうした手段でお前を陸奥から誘つて來たのは、お前に賴みたい事があつてだ」。

と庚申山の百足との事件を話して、今度の戰爭の助太刀を賴み込んだ。獵夫は早速に引き受けてその時期を待つてゐた。

甘く見てゐる庚申山の主は、また蛇をいぢめて領地を奪つてやらうと、一族郎黨の百足を集めて男體山に攻め寄せて來た。

それと見た女神の方でも、一族の青大將、蝮、縞蛇、山かがしなどを集めて、今度こそはと、神のお告の助勢を力賴に、男體山



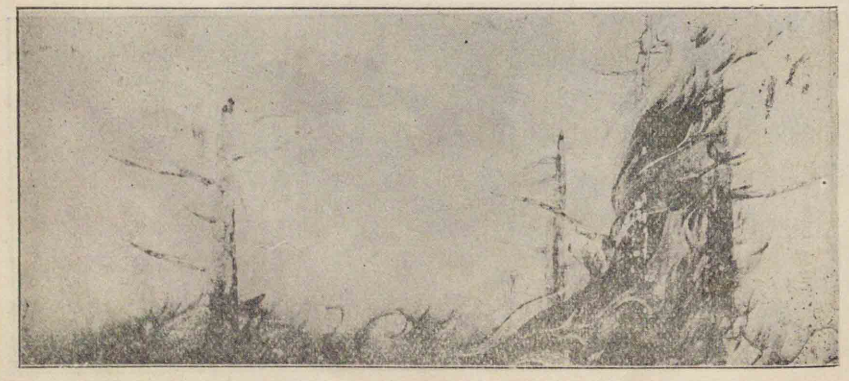
（其三）

（其四）

の麓の原に押し出した。

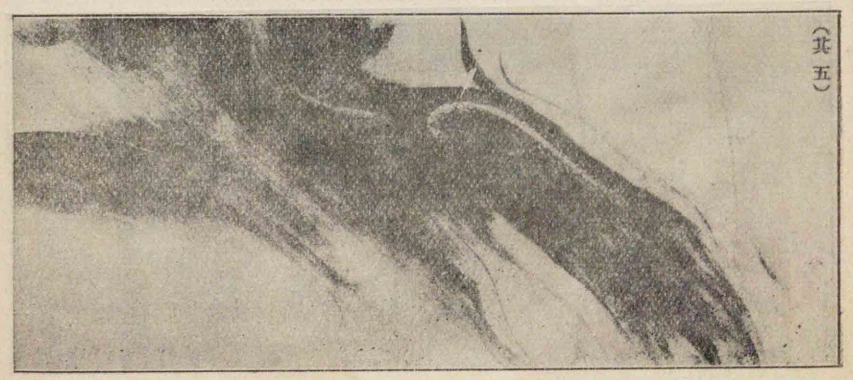
愈兩軍が接觸して、嚙む、螫す、卷きつく、大修羅場が展開された。然し女神軍の方がやはり旗色が惡くて浮足立つた。その時鏑矢が一本高鳴して空を縫ふよと見ると、狙はあやまたず、庚申山の主の大百足の眼にぷつりと當つた。流石の百足も痛手に堪へず、一目散に庚申山をさして逃げ出した。大將傷ついて軍全からずで、今度こそは蛇神の大勝利であつた。それ以來、二度と庚申山の手が伸びなかつたといふ。

そしてその戰のあつた場所が今の戰



場が原であり、その時の血が溜つて今でも赤い沼地が赤沼であり、獵夫が百足のあとを追つて、とうとう仕止めた迹に、記念に社を建てたのが今の宇都宮であるといふ。眞僞は元より私の關知せぬことで、ただ私は、かうした傳說にからまる鄕土の空氣に牽引の力を感ずるのであつた。そして、次の展覽會への出品製作はこれと定めた。

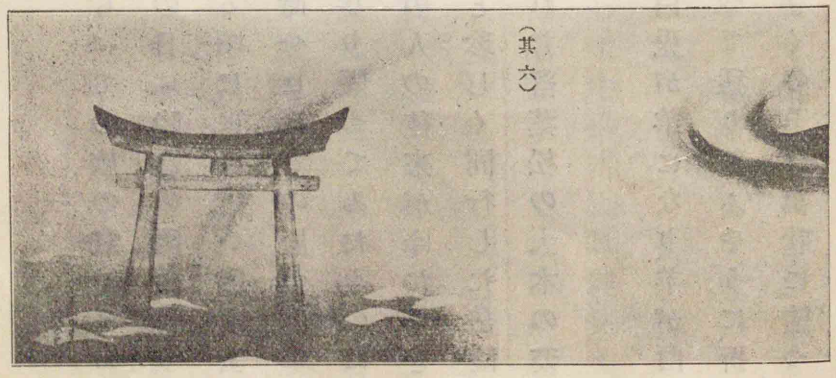
そこで餘暇さへあれば、次から次とその構想に耽つてゐたが、大體としては、傳說の段段を運んで描出することよりは、繪卷の形式をとる事が悧巧な遣方であ



（其五）

るとは、早くから定めて置いた事である。そして或說話の部分は容易に纏め得られたが、その戰の場面、蛇と百足との取組合は流石に考に餘つてしまつた。この場合に擬人法をやれば割合に無事であるが、然し甲冑などの事に就いては何等の知識も無い私には、それも一つの難問題であつた。

而も遂に考へ切れずに、「犬も歩けば棒に當る」の俚諺のやうに、それに又、去年の印象をもう一度色上することも惡くは無いことと、愈製作にかかる前の月、戰場が原に野州躑躅が眞盛の頃に、湯元の奥



（其六）

まで歩いて見ることにした。

神戰の字義を知つてから、傳説と思ひくらべての旅の氣持は、おのづから去年と異なつたものがあつた。その日は晩春の、雨になりさうな日ざしであつたが、戰場が原にかかる頃には、山近い雲の去來があわただしかつた。去年ここを通つた時分には、この原の奥の鑛山から鑛石を運搬する人馬の往來で、可なり賑つてゐたものだが、この春に索道が通じたとかで、その方への人の往來がぱたりと寂れたので、廣い原中に、湯元へ目ざす自分と、珍しく同行した岳陵氏の二人の姿があるばかり、處處に立ち枯れた落葉松の大木の姿は、一層寂しみを添へてゐる。

その行手にぽつかりと白い煙が立つた。白兎が羊になり、羊が白牛となり、その白牛が十頭になり、百頭になつて猛り狂ふやうに、折からの男體風に煽られて、流れる、舞ふ、渦を卷くの千態萬狀に擴つ

鑛山　足尾鑛山。

岳陵　中村氏。日本美術院同人。

てゆく。やがて草を舐める炎も見える。蛇の舌のやうなめらめらとした火、灌木を襲つては火龍のやうにくるくると捲き上る火。私の頭には、蛇と百足の鬪爭の光景がありありと閃いた。

繪卷の順序は、卷頭に、まづ神蛇の悠悠として中禪寺湖に浮いて、男體山の投影が大きく畫面の全體を鎭めた場面。すべて戰前平和の氣持である。

第一段には傳説中に於いての度度の敗戰の説明や、神の告を受けた發端の部分は全部省略してしまつて、直に、陸奥に出かけた白鹿の歸路の奔放の狀ををさめた。但畫面には獵夫は見せず、鹿の振り返つた姿體にその氣分を持たせた。

第二段は、女神と獵夫の立つて交渉に入つた場面。鹿は既に女神の姿に戻つて、一本の老楓樹の下に、獵夫もよろしき位置に立つ。服裝は神代。

第三段は全卷の中心。蛇と百足の混戰の場面であるが、說明的にはその描寫を盡さねばならないが、私は此處を、戰場が原に見た野火の光景をかりて、戰禍を象徵することにした。それで、全畫面に炎炎たる猛火を描くことにした。例の落葉松の枯木に纏はる炎も圖中に收めた。その火の全描寫面である內へ、放たれた矢の一條を、獵夫の助勢の意に描き入れた。

第四段には、暗雲迷迷とした中に手負の大百足、眼に矢を立てたまま遁走の狀を表した。以上で傳說の主眼を通じての說明、又は自分の解釋としての順序は終るのであるが、卷末に卷首と同じ大きさの紙面に、騷しかつた山湖の浪もをさまつて、水中に立つ男體の社の華表に夕虹が美しくかかつた平和の終局を表出することにした。勿論華表その物が古代にあつたには違ないことだが、私はそれはその傳說時代のものではなく、その傳說が今に傳へられてゐるといふ現代への連鎖の役目に使つたのであつた。

題名は最初の印象のままに「神戰の卷」と附けることにした。

（川端龍子――畫室の解放）

川端龍子　畫家。日本美術院同人。名は昇太郎。和歌山市の人。明治十八年六月生まる。初白馬會、太平洋畫會研究所等に學び、後歐米に遊ぶ。

大塔宮　護良親王をさす。當時尊雲法親王と稱す。

般若寺　律宗。奈良市奈良阪の南にあり。

虎の尾を履む　危險を冒すに喩ふ。易經、書經に出でたる語。

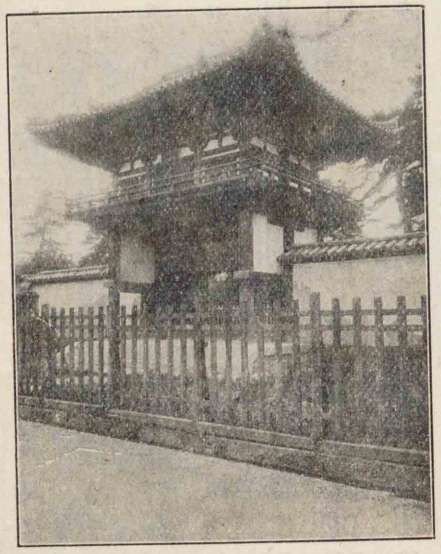
一乘院　奈良にありき。

二二　熊野落

大塔宮二品親王は、笠置の城の安否を聞し召されむ爲に、暫く南都の般若寺に忍びて御座ありけるが、笠置の城既に落ちて、主上囚れさせ給ひぬと聞えしかば、虎の尾を履むおそれ御身の上に薄りて、天地廣しと雖も御身をかくさるべき所なく、日月明なりと雖も、長夜に迷へる心地して、晝は野原の草に隱れて、露に臥す鶉の床に御涙を爭ひ、夜は孤村の辻に彳みて、人を咎むる里の犬に御心を惱され、何處とても御心安かるべき所なかりければ、かくても暫時はと思し召されける所に、一乘院の候人按察法眼好專、いかにして聞

大般若　佛經の名。六百卷あり。唐の玄奘三藏の譯。

きたりけむ、五百餘騎を率して未明に般若寺へぞ寄せたりける。折ふし宮に附き奉りたる人一人もなかりければ、一防防ぎて落ちさせ給ふべきやうもなかりける上、透間もなく兵既に寺内に打ち入りたれば、紛れて御出あるべき方もなし。さらば、よし自害せむと思し召して、既におし膚脱がせ給ひたりけるが、事協はざらむ期に臨みて、腹を切らむことはいと易かるべし。もしやと隱れて見ばやと思し召し反して、佛殿の方を御覽ずるに、人の讀みかけて置きたる大般若の唐櫃三つあり。二つの櫃はいまだ蓋を開けず。一つの櫃は御經を半過ぎ取り出して蓋をもせざりけり。この蓋を開けたる櫃のうちに御身を縮めて伏させ給ひ、その上に御經を引きかづきて隱形の咒を御心の中に唱へてぞおはしける。もし搜し出されば、やがて突き立てむと思し召して、氷の如くなる刀を拔きて御腹に指し當て、兵「ここにこそ」といはむずる一言を待たせ給ひける御心の中、推し量るも尙淺かるべし。さる程に、兵佛殿に亂れ入りて、佛壇の下、天井の上までも、殘る所なく搜しけるが、餘に求めかねて「これ體の物こそ怪しけれ。あの大般若の櫃を開けて見よ」とて、蓋したる櫃二つを開けて御經を取り出し、底を翻して見けれどもおはせず。蓋開きたる櫃は見るまでもなしとて、兵皆寺中を出で去りぬ。宮は不思議の御命を續がせ給ひ、夢に道行く心地して、尙櫃の中におはしけるが、もし復兵立ちかへり、委しく搜すこともあらむずらむと御思案ありて、やがて前に兵の搜し見たりつる櫃に入り替らせ給ひてぞおはしける。案の如く、兵共また佛殿に立ちかへり、前に蓋の開

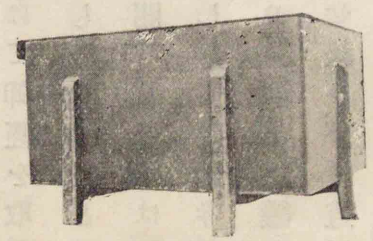


般若寺山門

玄奘三藏　法相宗の名僧。太宗の貞觀三年印度に遊び、十七年を經て長安に歸り、經論の飜譯に從事す。（西暦六〇二年―六六四年）

きたるを見ざりつるが覺束なしとて、御經を皆うち移して見けるが、からからとうち笑ひて、「大般若の櫃の中をよくよく搜したれば、大塔宮はいらせ給はで、大唐の玄奘三藏こそおはしけれ」と戲れければ、兵皆一同に笑ひて、門外へぞ出でにける。

かくては、南都邊の御隱家もかなひ難ければ、乃ち般若寺を御出ありて、熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御伴の衆には、光林坊玄尊、赤松律師則祐、木寺相模、岡本三河坊、武藏坊、村上彥四郎、片岡八郎、矢田彥七、平賀三郎、彼此以上九人なり。宮を始め奉りて、御伴の者までも、皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半にせめ、その中に年長ぜるを先達に作り立て、田舍山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。この君もとより龍樓鳳闕の內に人とならせ給ひて、華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば、御步行の長途は定めて協はせ給はじと、御伴の人人かねては心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる單皮、脚巾、草鞋を召して、少しも草臥れたる御氣色もなく、社社の奉幣、宿宿の御勤懈らせ給はざりければ、路次に行きあひける道者も、勤修を積める先達も、見咎むる事なかりけり。

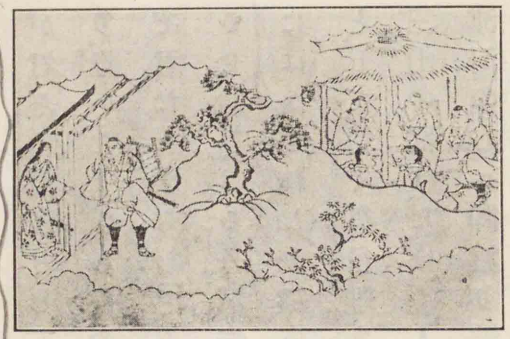


櫃　經

由良の湊　淡路の東岸にあり。

藤代、和歌、吹上、玉津島。共に和歌山縣海草郡に雨を含める云云　唐の盧綸の詩に、「孤村樹色昏ニ殘雨、遠寺鐘聲送ニ夕陽一」。

切目の王子　日高郡切目村。



太平記挿畫（元祿版）

由良の湊を見渡せば、澳漕ぐ船の楫緒たえ、浦の濱ゆふ幾重とも、知らぬ涙路に鳴く千鳥、紀伊路の遠山渺渺と、藤代の松にかかれる磯の涙、和歌吹上をよそに見て、月に瑩ける玉津島、光も今はさらでだに、長汀極浦の路、心を碎くならひなるに、雨を含める孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、あはれを催す時しもあれ、切目の王子に

兩所權現　熊野本宮と新宮とをさす。

熊野三山　本宮新宮に、那智を加へて稱す。

十津河　奈良縣吉野郡。

著き給ふ。

その夜は、叢祠の露に御袖をかた敷きて、夜もすがら祈り申させ給ひけるは、「傳へ承る、兩所權現はこれ伊弉諾、伊弉册の應作なり。わが君その苗裔として、いま朝日忽に浮雲のために隱されて冥闇たり。豈いたまざらむや。玄鑒むなしきに似たり。神若し神たらば、君何ぞ君たらざらむ」と、五體を地に投げて、一心に誠を致してぞ祈り申させ給ひける。丹誠無二の御勤、感應などかあらざらむと、神慮も暗にはかられたり。終夜の禮拜に御窮屈ありければ、御肱を曲げて枕として、暫く御目睡ありける御夢に、鬢結ひたる童子一人來て、「熊野三山の間は、なほも人の心不和にして、大義成りがたし。これより十津河の方へ御渡り候ひて、時の到らむを御待ち候へかし。兩所權現より案内者に附け參らせられて候へば、御道指南仕るべく候ふ」と申すと御覽ぜられ、御夢は卽ち覺めにけり。これ權現の御告なりけ

山路もとより云云　王維の詩に、「山路元無雨、空翠濕人衣」。

見上ぐれば云云　遊仙窟に、「向上則有青壁萬尋、直下則有碧潭千仞」。

りと、賴しく思し召されければ、未明に御悅の奉幣をささげ、やがて十津河を尋ねてぞ分け入らせ給ひける。その道の程三十餘里が間には、絶えて人里もなかりければ、或は高峯の雲に枕を敧て、苔の筵に袖を敷き、或は岩漏る水に渴を忍び、朽ちたる橋に肝を消す。山路もとより雨なくして、空翠常に衣を濕す。見上ぐれば、萬仞の青壁刀に削り、見おろせば千丈の碧潭藍に染めり。數日の間かかる嶮難を經させ給へば、御身もくたびれ果てて、流るる汗水のごとし。御足は缺け損じて、草鞋皆血に染まれり。御伴の人人も、その身鐵石にあらざれば、皆飢ゑ疲れて、はかば

かしくも歩み得ざりけれども、御腰を推し、御手をひきて、路の程十三日に十津河へぞ著かせ給ひける。（太平記）

二三　自然のあはれ

一　月と露

よろづの事は月見るにこそ慰むものなれ。ある人の「月ばかりおもしろきものはあらじ」といひしに、またひとり「露こそあはれなれ」と爭ひしこそをかしけれ。折に觸れば何かはあはれならざらむ。月花は更なり、風のみこそ、人に心はつくめれ。岩に碎けて清く流るる水のけしきこそ時をもわかずめでたけれ。沅湘日夜東に流れ去る、愁人のためにとどまることしばらくもせず」といへる詩を見しこそあはれなりしか。嵇康も「山澤に遊びて、魚鳥を見れば心樂ぶ」といへり。人遠く水草清き所にさまよひありきたるばかり、心慰むることはあらじ。（徒然草）

沅湘云云　唐の戴叔倫の詩に、「蘆橘花開楓葉衰、出レ門何處望二京師一、沅湘日夜東流去、不下爲二愁人一住少時上」

嵇康　西晉の人。字は叔夜。竹林七賢の隨一。（西暦二二三年―二六二年）

martyllcation

垂れ籠めて云云　古今集、藤原因香「たれこめて春のゆくへも知らぬまに待ちし櫻もうつろひにけり」。

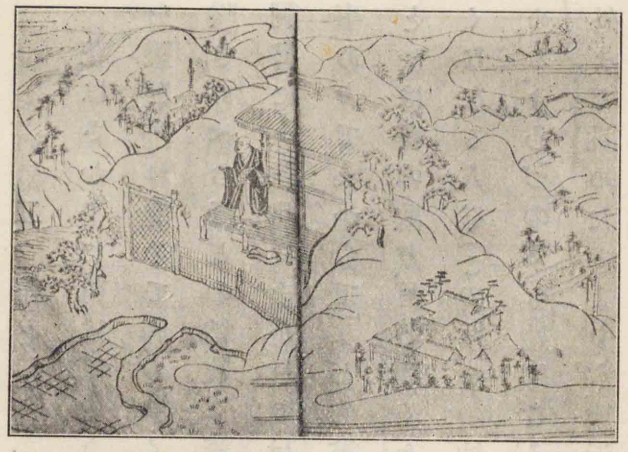
二　花と月

花はさかりに月は隈なきをのみ見るものかは。雨にむかひて月を戀ひ、垂れ籠めて春のゆくへ知らぬも、なほあはれになさけ深し。咲きぬべきほどの梢、散り萎れたる庭などこそ見所おほけれ。歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに早く散り過ぎにければ」とも、「障る事ありてまからで」なども書けるは、「花を見て」といへるに劣れることかは。花の散り、月の傾くを慕ふならひはさる事なれど、殊にかたくなる人ぞ、「この枝、かの枝散りにけり。今は見所なし」などはいふめる。よろづの事も始終こそをかしけれ。望月のくまなきを千里の外まで眺めたるよりも、曉近くなりて待ち出でたるがいと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、打ちしぐれたるむら雲がくれのほど、又なくあはれなり。椎柴、白樫などの

濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて心あらむ友もがなと、都戀しうおぼゆれ。

すべて月花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家を立ち去らでも、月の夜は閨の内ながらも思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。

（徒然草）



雙が岡（兼好諸國物語挿繪）

三、秋の野ら

あやしの竹の編戸のうちより、いと若き男の、月影に色合さだかならねど、艶やかなる狩衣に、濃き指貫、いと故づきたるさまにて、ささやかなる童一人を具して、遙なる田の中の細路を、稻葉の露にそぼちつつ

わけ行く程、笛をえならず吹きすさびたる、あはれと聞き知るべき人もあらじと思ふに、行かむ方知らまほしくて、見送りつつ行けば、笛を吹きやみて、山の際に惣門のあるうちに入りぬ。

榻に立てたる車の見ゆるも、都よりは目とまる心ちして、下人に問へば、「しかじかの宮のおはします頃にて、御佛事などさぶらふにや」といふ。御堂の方に法師共まゐりたり。夜寒の風に誘はれくる空だき物のにほひも、身にしむ心ちす。寢殿より御堂の廊にかよふ女房の追風用意など、人目なき山里ともいはず心づかひしたり。

心のままに茂れる秋の野らは、置きあまる露に埋れて、蟲の音がごとがましく、遣水の音のどかなり。都の空よりは雲の往來もはやき心ちして、月の晴れ曇ること定めがたし。（徒然草）

四、四季

をりふしの移り變るこそ物毎にあはれなれ。物のあはれは秋こ

そまされ」と、人毎にいふめれど、それもさるものにて、今一きは心も浮き立つものは春の景色にこそあめれ。鳥の聲などもことの外に春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草萌え出づる頃より、やや春深く霞みわたりて、花もやうやうけしきだつ程こそあれ、をりしも雨風うち續きて、心あわただしく散り過ぎぬ。青葉になり行くまで、よろづに唯心をのみぞ惱す。

禊の圖（光琳筆）

花橘は名にこそおへれ、なほ梅の匂にぞ、いにしへの事も立ち返り戀しう思ひ出でらるる。山吹の清げに、藤のおぼつかなきさまし

花橘は云云　古今集に「さ月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」。

たる、すべて思ひ捨て難きこと多し。

灌佛の頃、祭の頃、「若葉の梢涼しげに茂りゆく程こそ、世のあはれも人の戀しさもまされ」と人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月菖蒲葺く頃、早苗とる頃、水鶏の敲くなど、心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。

棚機祭るこそなまめかしけれ。やうやう夜寒になるほど、雁鳴きてくる頃、萩の下葉色づくほど、わさ田刈りほすなど、取り集めたることは秋のみぞ多かる。また野分のあしたこそをかしけれ。ひ續くれば、みな源氏物語、枕草

追儺の圖（爲恭筆）

灌佛　四月八日。灌佛會、又佛生會ともいふ。

祭　賀茂祭。四月の第二の酉の日に行はる。

六月祓　六月三十日。

御佛名　禁中の佛事。十二月に行はる。

荷前　十二月に行はる。十陵八墓に幣帛を奉る。

追儺　十二月晦の夜行はる。

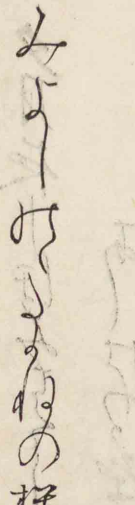
四方拜　一月一日の午前四時に行はる。

子などにことふりにたれど、おなじ事、また今更にいはじとにもあらず。おぼしき事いはぬは腹ふくるる業なれば、筆に任せつつ、あぢきなきすさびにて、掻いやり棄つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

さて冬枯のけしきこそ、秋にはをさをさ劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとどまりて、霜いとしろう置けるあした、遣水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れはてて、人ごとに急ぎあへる頃ぞ、又なくあはれなる。すさまじきものにして、見る人もなき月の、さむけく澄める二十日あまりの空こそ心細きものなれ。御佛名、荷前の使立つなどぞあはれにやむごとなき。公事どもしげく、春のいそぎに取りかさねて催し行はるるさまぞいみじきや。追儺より四方拜に續くこそ面白けれ。晦の夜いたう暗きに、松どもともして、夜半過ぐるまで人の門たたき走りありきて、何事にかあらむ、事事しくののしりて、足を空にまどふが、曉がたよりさすがに音なくなりぬるこそ、年のなごりも心細けれ。なき人のくる夜とて魂祭る業は、この頃都にはなきを、あづまの方には尚することにてありしこそあはれなれ。

かくて、明けゆく空のけしき、昨日に變りたりとは見えねど、引きかへ珍しき心ちぞする。大路のさま、松立て渡して、花やかに嬉しげなるこそまたあはれなれ。（徒然草）

二四　嵐も白し



太上天皇

後鳥羽上皇。

藤原秀能
歌人。和歌所寄人。承久の亂に大將軍に任ぜらる。亂後熊野にて出家し、仁治元年五月卒す。（一八四四年―一九〇〇年）

藤原定家朝臣
歌人。俊成の子。新古今集の撰者。正二位權中納言に至り、世に京極黄門と稱す。仁治二年八月薨ず。（一八二二年―一九〇一年）

藤原家隆朝臣
歌人。光隆の子。定家と名を齊しうす。新古今集撰者の一人。宮内卿從二位に進み、世に壬生二位と稱す。嘉禎三年四月薨ず。（一八〇八年―一八八七年）

藤原雅經
歌人。新古今集撰者。從三位參議に至る。又蹴鞠をよくす。家を飛鳥井と稱す。（一八八一年）

寂蓮法師
歌僧。俗名藤原定長。藤原俊成に養はれしが、定家生まるるに及び、遁れて僧となる。建仁二年寂す。（一八六一年）

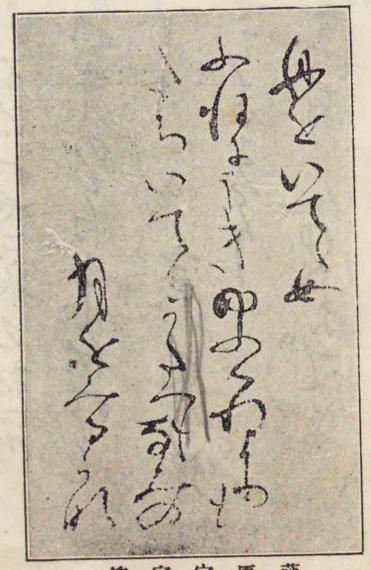
藤原定家（僞恭筆）

夕月夜しほみちくれはさのあしはわけをとゆくさをしか　藤原秀能

見渡せば花ももみぢもなかりけりうらのとまやの秋のゆふぐれ　藤原定家朝臣

わたのはらこぎいでてみればひさかたの雲いにまがふおきつしらなみ　藤原家隆朝臣

あらしふくみむろの山のもみぢ葉は竜田の川の錦なりけり



藤原定家筆

藤原雅經

うたがはしゆく雲にあれの雪すなり

ちるはなをきみとうらみぎの山

かつらぎや高間の桜さきにけり

たつたの山のかすみたにかくれて

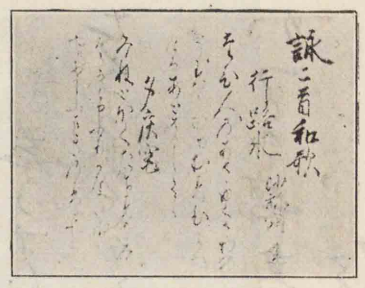
さびしさはその色もなかりけり

まきたつ山の秋のゆふぐれ　寂蓮法師

鴨社の禰宜。菊太夫と稱す。和歌所寄人たりしが、後薙髪して蓮胤と稱す。建保四年寂す。（一八一四年―一八七六年）

攝政太政大臣　藤原良經。藤原實の子。博く衆藝に通じ、最も和歌に長ず。世に後京極攝政と稱す。建永元年三月暴に薨ず。（一八二九年―一八六六年）

宮内卿　歌人。師光の女。後鳥羽天皇の宮女。又文及び畫を善くす。



寂蓮法師筆

鴨長明

石川やせみのふ川のせきよりれば
月もながれを忘れてぞすむ

攝政太政大臣

人すまぬ石ばしせきの板屋
あれましのちはうづ桜ばせ

宮内卿

花さそふ山ぢのゆきぜにさまよふ
こぎゆく舟のあとみるまで

皇太后宮大夫俊成

皇太后宮太夫俊成　歌人。藤原俊忠の子。千載集の撰者。正三位に進み、五條三位と稱せらる。後薙髪して釋阿といふ。元久元年薨ず。（一七七四年―一八六四年）

こは元弘元年七月、藤原俊基の東下の條なり。

落花の雪に踏み迷ふ、交野の春の櫻がり、紅葉の錦を著て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明すほどだにも旅寢となれば物うきに、恩愛のちぎり淺からぬ、わが古里の妻子をばゆくへも知らずおもひ置き、年久しくも住み馴れし、九重の帝都をば、今を限とかへりみて、思

ゆきすぎぬ風のあきぬ
うばたまのくるる夕ぐさ
西行法師

こぎ出でぬ海のあなたの
土佐さたの海のあさのゆうぎれ

二五　落花の雪

はぬ旅に出で給ふ、心のうちぞあはれなる。憂きをばとめぬあふ阪の、關の清水に袖沾れて、末は山路をうち出の濱、沖を遙に見わたせば、潮ならぬ海にこがれ行く身を憂き舟のうき沈み、駒もとどろと踏みならす、勢多の長橋うち渡り、行きかふ人にあふみ路や、世をうねの野に鳴くたづも、子を思ふかと哀なり。時雨もいたくもる山の木の下露に袖ぬれて、風に露ちる篠原や、篠わくる道を過ぎ行けば鏡の山はありとても、涙に曇りて見え分かず。物を思へば夜のまにも、おいそのの森の下草に、駒をとどめて顧みる、故郷を雲や隔つらむ。番場、醒が井、柏原、不破の關屋は荒れ果てて、なほもるものは秋の雨いつかわが身のをはりなる、熱田の八劔伏し拜み、潮干に今やなるみ潟、かたむく月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくととほたふみ、濱名の橋の夕汐に、ひく人もなき捨小舟、沈み果てぬる身にしあれば、誰か哀とゆふ暮の、入相なれば今はとて、池田の宿

櫻狩花の雪ちる春の曙」。
紅葉の錦　拾遺集、公任、「朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦著ぬ人ぞなき」。
世をうねの野に　古今集、詠者不詳、「近江より朝立ちくればうねの野にたづぞなくなるあけぬこの夜は」。
時雨もいたくもる山　古今集、貫之、「白露も時雨もいたくもる山は下葉殘らず色づきにけり」。
潮干に今や　新古今集、秀

（華丘映岡校）　船の首鷁頭龍

能「さよ千鳥聲こそ近くなるみ潟傾く月に汐やみつらむ」。

重衡中將　左近衛中將。清盛の子。壽永三年一谷の戰に捕へられ、翌年木津川に斬らる。（一八一七年―一八四五年）

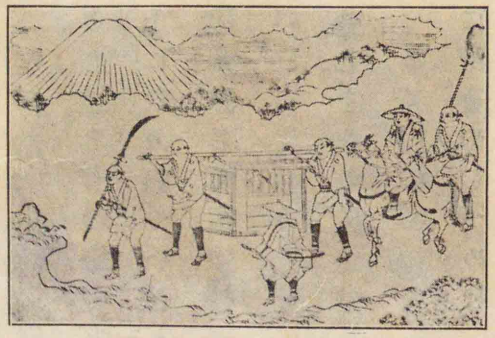
命なりけり　新古今集、西行「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」。

に著き給ふ。元暦元年の頃かとよ。重衡中將の東夷の爲に囚れて、この宿に著き給ひしに、

東路の埴生の小屋のいぶせきに
ふるさといかに戀しかるらむ。

と、宿の主人が詠みたりし、その古のあはれまでも、思ひ殘さぬ涙なり。

旅館の燈かすかにして、鷄鳴曉を催せば、匹馬風にいばえて、天龍川をうち渡り、さやの中山越え行けば、白雲道を埋み來てそこともしらぬ夕暮に、家鄉の天を望みても、昔西行法師が「命なりけり」と詠じつつ、再び越えしあとまでも、羨しくぞ思はれける。隙ゆく駒の足はやみ、日既に亭午にのぼれば、乾飯進らするほどとて、輿を庭前に舁き止む。轅を敲きて警固の武士を近

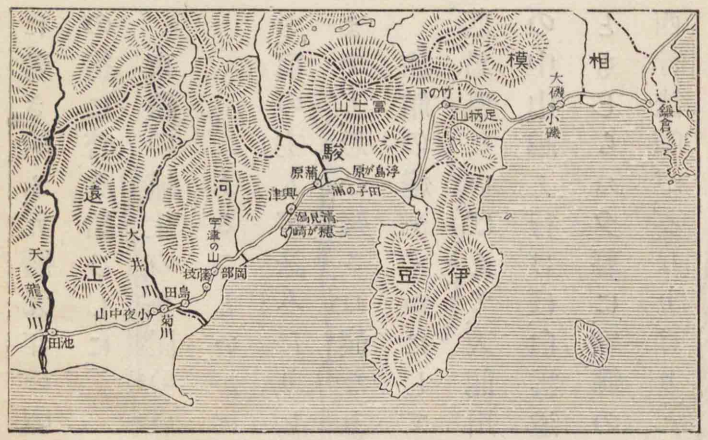


俊基東下（古板太平記挿圖）

光親卿
藤原氏。光雅の子。權中納言に任じ、才學あり。承久の役、院宣を作り義時の罪を鳴す。事破れて執へられ、駿河加古阪に斬らる。（一一八八―一年）

南陽縣の句
藤原宗行の作。菊水のことは、風俗通に「南陽酈縣有二甘谷一。谷中水甘美。上有二大菊一。落レ水從レ山流下、得二其滋液一。谷中人家、飲二此水一。上壽百二十、其中百餘歳、七八十者則爲レ夭」。

亀山殿
京都府葛野郡嵯峨にありし亀山の離宮。

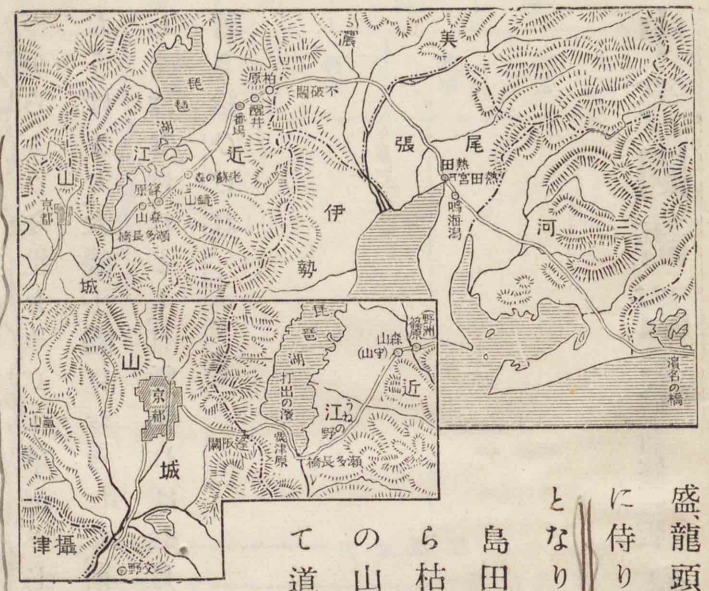


づけ、宿の名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり」と答へければ、承久の合戰の時、院宣書きたりし咎によりて、光親卿關東へ召し下されしが、この宿にて誅せられし時、「昔南陽縣菊水、汲二下流一而延レ齢。今東海道菊川宿二西岸一。而終レ命」と書きたりし遠き昔の筆のあと、今はわが身の上になり、哀やいとど增りけむ、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれける。

古もかかるためしを
きく川の
おなじ流に身をやしづめむ。

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、亀山殿の行幸の、嵐の山の花

夢にも人に
伊勢物語に、上句「駿河なるうつの山べのうつつにも」とあり。



盛龍頭鷁首の舟に乘り、詩歌管絃の宴に侍りしことも、今は再び見ぬ夜の夢となりぬと思ひ續け給ふ。

島田藤枝にかかりて、岡べの眞葛うら枯れて、ものがなしき夕暮に、宇都の山べを越え行けば、蔦楓いと繁りて道もなし。昔業平の中將のすみかを求むとて、東の方へ下りて、「夢にも人にあはぬなりけり」と詠みたりしもかくやと思ひ知られたり。清見潟を過ぎ給へば、都にかへる夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとど涙を催され、むかひはいづこ三穂が崎、興津、蒲原、うち過ぎて、富士の高嶺を見給

上なき思　新古今集、家隆「富士の根の煙はなほも立ちのぼる上なきものは思なりけり」。

へば、雪の中よりたつ煙、上なき思にくらべつつ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎ行けば潮干や淺き舟浮けて、下り立つ田子のみづからもうき世をめぐる車がへし、竹の下道ゆきなやむ、足柄山のたうげより、大磯、小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎの、いそぐとしもはなけれども、日數積れば、七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ著き給ひけれ。（太平記）

中等國語讀本　新修二版　卷七　終

時代					安土桃山時代		江戸時代
年	二三〇〇						
天皇	後土御門	後柏原	後奈良	正親町	後陽成	後水尾	明正
將軍	義尚	義澄	義植	義晴	義輝	信長	秀吉

藤原惺窩
細川幽齋
松永貞德
西山宗因
中江藤樹
里村紹巴

義經記
【連歌】
【俳諧】
犬菟玖波集（二一七四）
【御伽草紙】

近古文學一覽

中等國語讀本新修一版卷七附錄

紀元	天皇	武家	作者	作品
平安時代				
鎌倉時代 一九〇〇	後鳥羽	頼朝	藤原俊成	水鏡
	土御門	頼家	藤原定家	方丈記
	順德	實朝	鴨長明	新古今和歌集(一八六五)
	仲恭	義時	源實朝	金槐集
	後堀河	泰時	藤原隆家	保元物語
	四條		藤原親定	平治物語
	後嵯峨	時頼	鸞	平家物語
	後深草	長時		
	龜山			
	後宇多	時宗	日蓮	
	伏見		阿佛尼	
	後伏見	貞時		
	後二條	師時	西行	
建武中興・吉野時代 二〇〇〇	花園	高時	吉田兼好	
	後醍醐		畠山親房	
	後村上	尊氏	北畠親房	
		義詮	源光行	
	後龜山	義滿	一條良基	
	後小松		宗良親王	玉葉集(一九七二)
	稱光	義持	二條良基	增鏡
	後花園	義政	阿頓	源平盛衰記
	後土御門	義尚	世阿弥	東關紀行
	後柏原	義澄	清次	十訓抄(一九二二)
	後奈良	義植	飯尾宗祇	古今著聞集(一九二四)
	正親町	義晴	太田道灌	宇治拾遺物語
室町時代 二〇〇〇		義教	良兼	十六夜日記
		義持	宗良親王	太平記
		義滿	三條西實隆	徒然草
		義政	宗鑑	神皇正統記
		義尚	山崎宗鑑	風雅集(二〇〇六)
		義澄	肖柏	新葉集(二〇四一)
		義植	三條西實隆	【謠曲】
		義晴	細川幽齋	【狂言】
		義輝	藤原惺窩	曾我物語
		信長	巴里村紹	義經記
安土桃山時代 三〇〇〇				【連歌】
				【俳諧】
				犬莵玖波集(二七四)
				【御伽草紙】

中等國語讀本 新修一版 卷七 終

江戸時代 | 桃山時代 | 室町時代 | 建武中興・吉野時代 | 鎌倉時代 | 平安時代

三〇〇 | 二〇〇 | 二〇〇〇 | 一九〇〇

後水尾正 | 後陽成 | 正親町 | 後奈良 | 後柏原 | 後土御門 | 後花園 | 稱光 | 後小松 | 後龜山 | 後村上 | 後醍醐 | 花園 | 後二條 | 後伏見 | 伏見 | 後宇多 | 龜山 | 後深草 | 後嵯峨 | 四條 | 後堀河 | 仲恭 | 順德 | 土御門 | 後鳥羽 | 安德 | 高倉 | 六條 | 二條

秀吉 | 信長 | 義輝 | 義晴 | 義植 | 義澄 | 義尚 | 義政 | 義敎 | 義持 | 義滿 | 義詮 | 尊氏 | 高時 | 師時 | 貞時 | 時宗 | 長時 | 時頼 | 泰時 | 義時 | 實朝 | 頼家 | 頼朝

成 俊 原 藤
然 法
明 長 明
源 實 朝
隆 家 原 藤
家 定 原 藤
親 鸞
蓮 日
阿 佛 尼
西 行
行
光 源

好 兼 田 吉
房 親 畠
相 爲 原
北 藤
宗 良

良 兼 條 一
灌 道 田 太
祇 宗 尾 飯
山 崎
三 條 西
柏 肖

王 親
頓 阿
二 條 良 基
清 次
觀 世

高 惟 原 藤
齋 幽 川 細
鑑 宗
隆 實
松 永 貞 德
因 宗 山 西
樹 藤 江 中
巴 紹 村 里

【御伽草紙】

【連歌】
【俳諧】
犬莵玖波集(三七四)

【謠曲】
【狂言】
曾我物語
義經記

太平記

徒然草
神皇正統記
風雅集(二〇〇八)
新葉集(二〇四一)

玉葉集(一九七二)
增鏡

源平盛衰記
東關紀行
十訓抄(一九二二)
古今著聞集(一九二四)
宇治拾遺物語
十六夜日記

水鏡
方丈記
新古今和歌集(一八六五)
金槐集
保元物語
平治物語
平家物語

大二月十五年
正十七日
文部省檢定濟
中國語學科用
校

大正十四年十月二十五日印刷
大正十四年十月二十八日發行
大正十五年二月八日訂正印刷
大正十五年二月十一日訂正發行

中等國語讀本（新修一版）

定價	
自卷一至卷六	各金四拾貳錢
自卷七至卷十	各金參拾六錢

昭和二年度定價	
自卷一至卷六	各金七拾壹錢
自卷七至卷十	各金六拾壹錢

不許複製

編者　落合直文
補修者　金子元臣

發行者　東京市神田區錦町一丁目十番地
株式會社明治書院
取締役社長　鈴木友三郎

印刷者　東京市神田區三崎町三丁目一番地
細谷祐三

發行所　東京市神田區錦町一丁目
振替口座東京四九九一番
株式會社明治書院
電話神田(25)二二六九五番
六九六番

弘文堂
書房